

第10節 本丸池西の郭（土壙状遺構）の調査

第1項 1990-2次調査

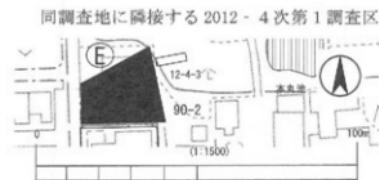
（1）地点と調査に至る経過

同地は、地形観察から土壙跡と推定されてきた地上遺構である。本丸池の西に位置し、私部城の二郭付近の周囲の守りを固めたものとみられてきた。昭和36年の測量図や航空写真をみると、現況の土壙状の地形とは異なり、東西最大23m、南北最大22mほどの広がりが確認できた。近年までの改変により土壙状に遺存したが、本来の形状から、郭とするのが妥当である。この経過をふまえ、現状では郭（土壙状遺構）と併記する。

同地の試掘調査時点で既に一定の切土・整地がなされていた。調査地に約1m四方の調査区を4箇所設定している。

（2）層序（第180図）

a) 現代整地土～近世堆積土



第178図 1990-2次 調査地点位置図



第179図 1990-2次 調査区平面図

の層序を参考にすると次のようになると考えられる。第2調査区第1層は同地を平坦にした現代の整地土とみられる。第2調査区の第1層あるいはその上層を切り崩し、盛土されたものとみられる。

第2調査区第2・3層は近世から現代までの土壤と考えられる。第1調査区では対応する層が削平されたものと考えられる。第3層は中世以前の旧地表土の可能性も残る。

(b) 郭（土壙状遺構）盛土

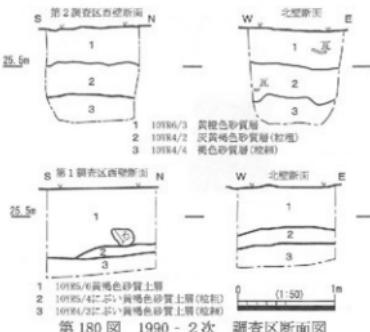
第1調査区第1層は周辺の地盤層に類似するが、10cm大の石も含まれ、異なる層と判断できる。地盤層を由来土とした盛土と考えられる。

(c) 地盤層

第1調査区第2・3層は黄褐色系の砂層と記述され、遺物等も含まれず、地盤層とみられる。

（3）小結

遺構・遺物検出には至らなかったが、堆積状況を知る際には重要な手がかりが得られた。調査地の第2調査区における中世段階の標高は低く、この付近が郭の西縁に位置するものと推定できる。



第2項 1992年度調査

(1) 地点と調査に至る経過

本丸池西の郭（土塁状遺構）の南に位置する。1990・2次調査の南側にあたり、昭和初期の写真等の観察からは、本調査地の北端付近に郭の南縁が位置していたことがわかる。分譲住宅建設に伴い、試掘確認調査が実施された。なお、本調査時点ではすでに郭の南縁は削平され平坦面とされていた。すでに「概要」は報告されているが（交野市教委1993）、未掲載であった写真資料・断面図をふまえて再報告を行う。

調査区は、第1・2調査区が設定された。ともに頗著な遺構・遺物は検出されなかったが、堆積状況が異質であったため、第1・2調査区間に土塁・堀などの存在が推定された。このため両調査区の間に第3～5調査区を設定した。

(2) 層序と旧地形（第183図）

(a) 現代表土・旧耕作土

断面図から正確な標高は不明であるが、およそ旧地表面標高がT.P. 24.0m前後とみられる。現地

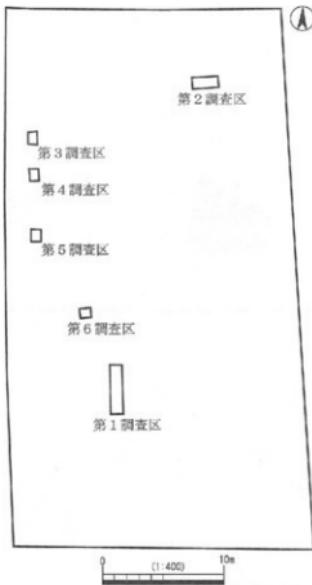


第181図 1992年度 調査地点位置図

表上は、宅地化に伴う整地上から、旧耕作土およびその床土である。断面図では第1調査区第1～3層・第3調査区第1層上半・第5調査区第1層である。

(b) 盛土

第3～6調査区においては、現地表下0.5mまで掘り下げた結果、後世の盛土が確認されたと報告される。断面図では、第3調査区第1層下半～3層・第4調査区第2～4層である。この堆積状況は調査区の写真資料からも追認できる。これらの盛土が施された年代は不明であるが、こうした同地点における起伏は昭和初期の測量図・航空写真でも認められない。また写真中でも頗著な近現代遺物は認められることから、近現代以前のもとのとみられる。



第182図 1992年度 調査区平面図

(c) 郭（土壌状遺構）盛土

第2調査区の堆積状況については、概要にて第1調査区と異なる堆積と記されるとともに、後世盛土とされた第3～6調査区の堆積状況とも區別して記述されている。写真観察によると、ブロックが含まれるが、第3～6調査区の堆積状況に比べ空隙が少ない堆積が認められる。同調査区の位置からは、本丸池西の郭（土壌状遺構）の盛土が削平されず遺存したものと考えられる。

(d) 地盤層

第1調査区では、現地表下40cmほどで、砂層からなる地盤層を検出している。これに対して他調査区では顕著な地盤層が認められなかった。第3～6調査区では同等の掘削深度でも盛土層が確認されており、地盤面の標高は低いことが確認できる。

(d) 旧地形の推定

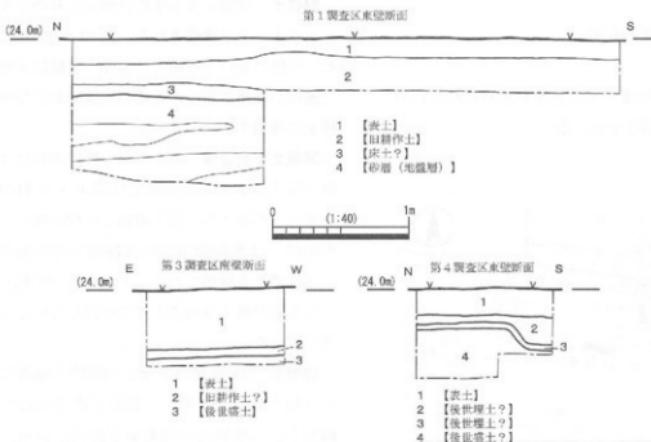
既報告の記述と写真観察から、調査区北東端の第2調査区で、郭（土壌状遺構）の南端とみられる堆積層が確認され、調査地南の第1調査区では

地盤層が確認された。

これに対して、北の第3～6調査区においては、同等の掘削深度においても地盤層まで到達せず、盛土により埋没していた。このことから、第3～6調査区には一定の深さの落ち込みが存在したことがうかがえる。この落ち込みが北に接する郭（土壌状遺構）と関連する可能性は高いものの、自然地形であるのか、人為的な遺構であるのか、どの程度の深度になるのか、またいずれの方に向延びるのか、埋没年代など、不明な点が多い。

(4) 小結

第2調査区付近に本丸池西の郭（土壌状）遺構の本来の南端が位置していたものと推定できる。また、概要においても示唆されていたとおり、それより南には落ち込みが存在したことがわかる。ただ、本調査では年代を決定する遺物等も出土しておらず、この落ち込みの形状自体も確認できていない。本丸池西の郭と関連するものであるか否かは、今後の調査課題となる。



第183図 1992年度 調査区断面図

第3項 2012 - 4次 第1～3調査区

(1) 地点と調査に至る経過

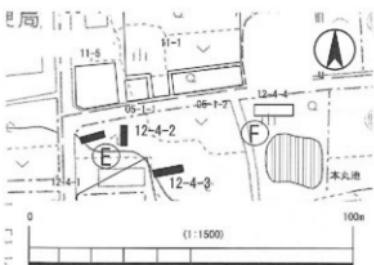
現交野郵便局の東に残存する高まりについては、その形態から私部城中心部を囲繞する土堀と評価されてきた。これは本節1項でも述べたおり、昭和初期の写真・測量図の観察から確認された旧状からは、郭と呼べる規模のものであった。これが現代の改変により土壙状に残存するものである。ただ、ここまで土壙として周知されている経過もあり、郭（土壙状遺構）として記述する。

これまでの調査の中ではこの地上遺構の構造・年代等を検討する資料が得られていないかった。こうした課題を解決するために調査検討委員会の指導の下、発掘調査を実施した。

第1調査区は、土壙状遺構の西端を横断するよう、幅約1m、長さ約12mで南西から北東方向に設定した。第2調査区は、東西1.2m、南北8.5mで土壙状遺構の中央部に南北に設定した。第3調査区は土壙状遺構の東端に位置し、幅1.3m、長さ8.1mで西南西から東北東の方向に設定した。

(2) 層序（第186図）

各調査区で堆積状況に差異も認められるため、調査区ごとに層序を述べる。



第186図 2012 - 4次 調査地点位置図

(a) 第1調査区

現代表土～近現代堆積層 第1層は現代表土である。調査区東端で確認された現代擾乱上に堆積するもので、近年に形成されたものである。

第2～20層までは、近世までの瓦等の遺物を含む堆積層である。昭和36年の測量図では竹藪として記されており、竹林として利用される過程で繰り返し攪拌を加えられていたものとみられる。下層の盛土等の遺構層を削りこんで形成された層である。

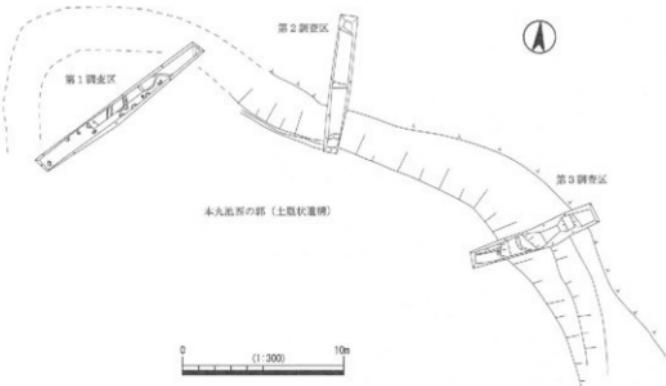
郭盛土上の遺構 後述の土壙状遺構盛土上では2条の溝およびピットを検出している。これは黄褐色のシルトなど地盤層由来土による埋土により埋没するものでおおむね南北方向に掘削されている。第22・23層があたる。また、溝の間を中心にして同様の堆積層が第19～21層に堆積する。

地盤層由来土は、すでに高まりとなっている同じ周辺で自然に供給される埋土ではない。地盤層由来土により構成され、溝と同時に併存した地上遺構が存在したものと推定される。この地上遺構の解体時に周辺に残土が堆積したものとみられる。その有力候補として築地が挙げられる。

郭盛土 砂質シルトまたは砂混じりのシルトブロック土により構成される。第24～28層にあたる。東側に先に土を置き、西側へと順に土を置いた過程が確認できる。後述の地盤面および中世構築上に堆積する。

郭盛土下面遺構 盛土下面で検出されたピット群の埋土である。断面図では第30・31層の2基のピットがあたる。出土遺物で年代の確定できるものは、14世紀前半頃の瓦器碗などである。盛土とは異なる層相であることから、いずれのピットも先述の盛土以前にすでに埋設していたものと考えられる。

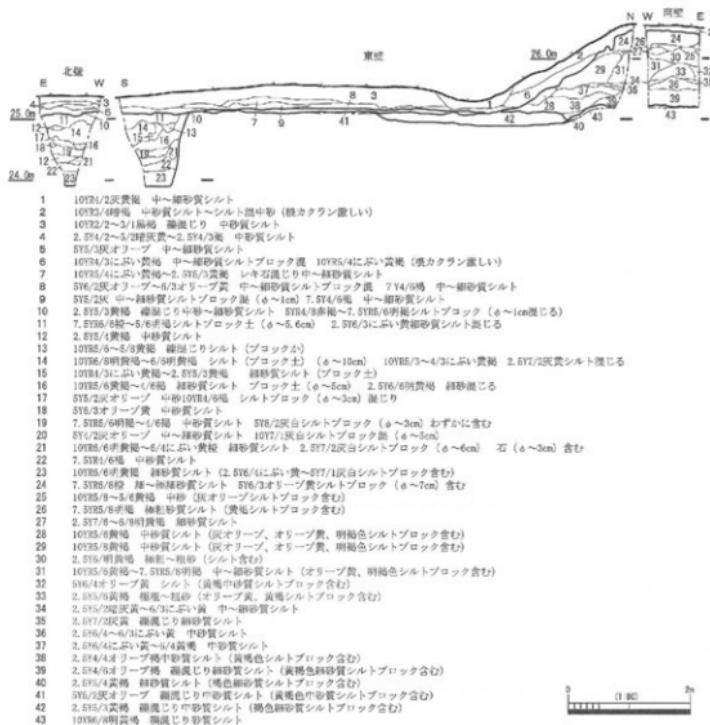
地盤層 第32層は黄褐色の堅固な礫混じりシルト層である。本郭、二郭などの中位段丘層と類似し、同地周辺の地盤層と認められる。調査区内全域の最下層で確認された。調査区東端で



第185図 2012-4次 調査区配置図



第186図 2012・4次 第1調査区断面図



第187図 2012-4次 第2調査区断面図

T.P. 25.6m、調査区西端でT.P. 25.3mと、東から西へ向かって低く堆積する。

(b) 第2調査区

現代表土～近現代堆積層 第1層は、現代の耕作等に伴い掘削された溝である。下層遺構の形態等を反映したものではない。

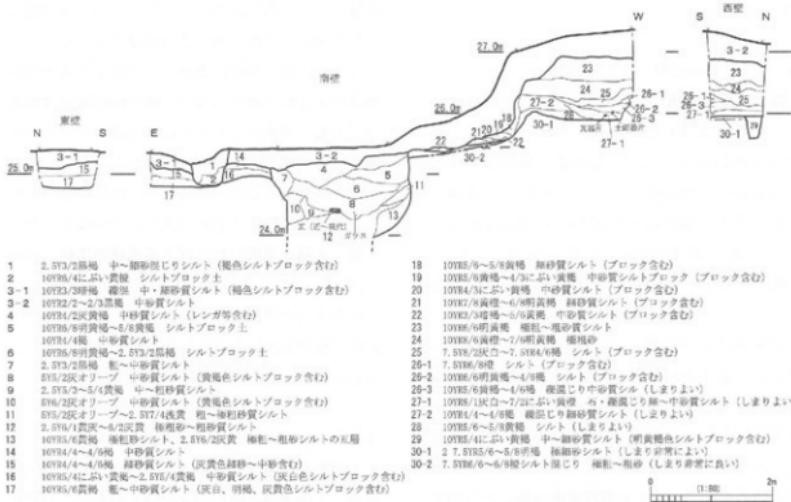
第2・3層は竹林の土壤である。

第4～10層も現代表土と類似するもので同様の竹林土壤と考えられる。

遺構埋土 調査区北端で検出された土坑の埋土で第11～23層にあたる。層序から後述の郭盛土

との先後関係が決定できず、層中からは14世紀頃から16世紀頃までの遺物が出土し、最新層の遺物から、おおむね16世紀代の間に埋没したもののとみられる。出土遺物からも郭と併存した可能性が残る。

郭盛土 調査区南端で確認された第24～40層にあたる。地盤層由来とみられる黄褐色系または灰色系のブロック土と、旧地表土などに由来するとみられる褐色・赤褐色系のブロック土が交互に積まれる。後述の下面遺構との関係から16世紀代でも中頃から後半に構築されたと考えられる。なお、第24は竹林土壤の直下にあたり、土壤形



第188図 2012-4次 第3調査区断面図

成にあたり大きく搅拌を受けた可能性がある。

郭盛土下面遺構 第42層は、幅が広く浅い溝の埋土である。層相は上墨状遺構盛土と大きく異なるものではなく、盛土時に整地され埋没した可能性が高い。同溝出土遺物には16世紀前半から第3四半期頃のものとされる瓦質土器擂鉢片があり、埋没年代をその頃に求められる。

地盤層 第43層以下の地盤層は第1調査区と共に通する。最上面はT.P. 25.3mと前後である。

(c) 第3調査区

現代表土～近現代堆積層 第1・2層は現代の耕作に伴う溝埋土である。地下遺構の形態を反映するものではない。第3層は竹林の土壤である。

第4～13層は、近現代現代のガラスから近世瓦までを含むブロック土を中心とした堆積層である。最大幅約2.4m、深さ1.2m以上である。近現代に埋没した廐棄土坑と考えられる。

旧地表土層 第14～17層は平坦面、第18～

22層は斜面部に堆積した旧地表土層である。その年代は出土遺物から確認できていないが、層序から、おおむね中世以後から近世頃までのものと推定できる。

郭盛土 第23～28層は現況の土墨状遺構の盛土である。黄褐色の砂混じりシルト層を中心としており、周辺の地盤層を切土して供給されたと考えられる。なお、上部の第23層は竹林土壤として搅拌を受けた可能性がある。瓦器碗・土師器皿小片などの中世遺物を含むが極めて小片であり盛土中に混入したものと考えるのが妥当である。

郭盛土下面遺構 第29層の溝のほかに、ピットを検出した。また、郭盛土の第27-2・28層はこれらの遺構と同時併存し、堤または小規模な土壙として機能した可能性も残るものである。

地盤層 第30層は第1・2調査区と共に通する地盤層である。本調査区ではT.P. 26.0m前後と高い標高で検出された。郭盛土以前から比高約1mの丘状の地形が存在したことが確認できる。

(3) 遺構

(a) 郭（土壘状遺構）と上面遺構

郭（土壘状遺構） 本節第1項でも述べたように、土壘または土壘状遺構とされてきたが、本来は東西最大長約22m、南北最大長約23m程度の小高い平坦面を有していたと判明した遺構である。調査で確認された郭上面の標高は最大で約T.P. 27.1m前後で比高は1.5～2mほどである。二郭南西を防衛する郭として機能したものと考えられる。

地盤面および中世遺構上に盛土を行い形成されていた。盛土の厚さは東半の第2・3調査区で1m前後と東側で厚く、西端の第1調査区で20cm前後と西側へ向かうにつれて薄くなる。第1調査区の堆積状況から極端な後世の切土がなされた痕跡も認められず、本来の郭形状を反映したものである。郭の上面に2～3段の高低差を伴うものであったことが確認できる。

盛土には、周辺地の地盤層由來のブロック土も多く認められた。瓦器片などの14世紀代まで遡りうる遺物小片も混じる。この供給元としては、周辺に本丸池などの堀を掘削したり、切土により郭形状を整える際に生じた堆土が考えられる。遺物片は盛土供給時に、周の中世集落遺構が削平され混入したものと考えられる。

上面遺構 郭の西縁に位置する第1調査区で、並行して南北に延びる溝1・2を検出した。埋土は地盤層由來のブロック土を中心にして構成されており、一気に埋められたものである。埋土の特徴から耕作に伴う溝ではないと判断できる。郭の

西縁に沿って南北にのびることからは、区画施設として機能した溝と考えるのが妥当である。

さらに、溝と周辺に堆積する地盤層由來土は自然に将来される層ではない。溝の機能時には築地などの地上遺構として溝周辺に付随していたと考えられる。溝間の距離は0.7mであり、ここに郭西縁を区画する築地が存在した可能性が高い。なお、同溝内には出土遺物は含まれていなかった。

郭（土壘状遺構）および上面遺構の年代 後述の盛土下面遺構出土遺物から、16世紀前葉～第三四半期頃の構築と考えられる。上面遺構の2条の溝（推定築地）も郭とともに構築されたものとみられる。

(b) 第1調査区の土壘下面遺構

土壘下面遺構は、すべての調査区で検出された。なお、上面遺構と確定できないものもここで記述する。ピットが検出され、褐色のシルトまたは細砂を埋土とするものが多い。この中で、黄褐色の地盤層由來土を埋土とするピット11の層相は上面遺構の溝と類似するとともに、土壘盛土の範囲外に位置し、上面遺構の可能性がある。

径が0.3m前後と大きく、深めのピット4・5・6・8・9・10・12が一連のものである可能性が高い。今後の周辺の調査により、柵列または建物跡に復元しうる。このうち、ピット4から出土した瓦片からは、瓦器片が伴う年代より新しい年代と推定されるが詳細は不明である。

また同様に径が0.15m前後と細く、浅めのピット7・13・1・2が類似する。特にこれら的一群は一列に並ぶものであり、柵列や建物跡の可能性

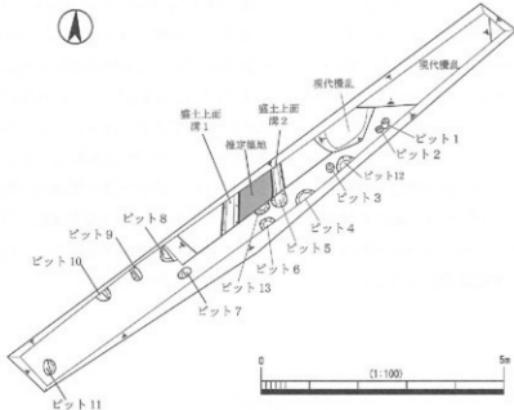


第189図 2012-4次 第1～3調査区断面合成図

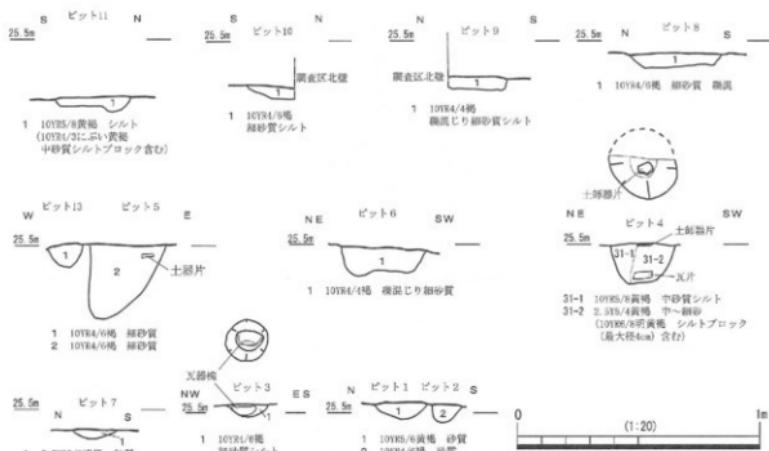
が高い。ピット3出土瓦器碗から14世紀前半頃のものとみられる。瓦器碗片は上半を削られており、その残片は今回の調査で確認できなかつた。周辺地の整地が、郭（土壘状遺構）の盛土以前に実施されている可能性を示すものである。

(c) 第2調査区土坑

調査区北端で、深さ 1.2m の土坑の一部を検出した。地盤層を切り込んで形成され、底面は平坦に整地されている。湧水は認められず、室として機能した可能性が考えられる。



第190図 2012-4次 第1調査区地盤平面図



第193図 2012-4次 第1調査区造構断面・平面図

層序から郭盛土との先後関係は決定できていない。出土遺物は14世紀頃の遺物も含むが、最新相のものは16世紀頃のものもあり、最新相の遺物年代からは、郭の機能段階に併存した可能性が残る。土坑と郭外縁の方向軸が類似することからも郭と併存していた可能性がある。なお、ほぼ直下に切り落とす斜面形成の方法が二郭北側斜面でも認められ、郭周辺に掘り込まれた堀などの可能性も皆無とはいえない。郭との関係は遺構の規模・形態を明らかにした上で評価する必要がある。

(d) 盛土下面遺構

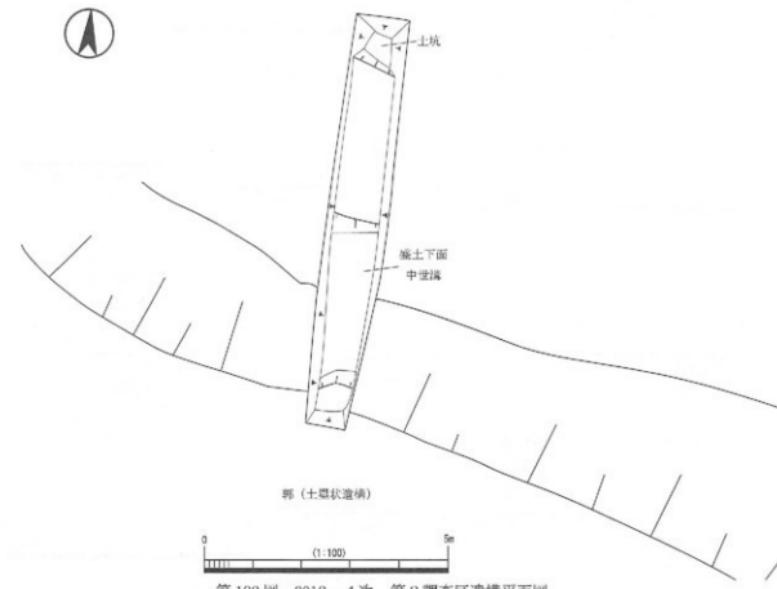
調査区南端では、盛土下面で溝を検出した。幅3.2~3.6mほどの溝で、西南西から東南東に軸をもつ。上墨状遺構（郭）の縁とは方向が異なることからも上面遺構との関連は考えられない。

溝中から出土した瓦質土器擂鉢片から16世紀中～後半頃に埋没年代が位置付けられる。

(e) 第3調査区盛土下面遺構

盛土上では遺構が検出されず、盛土下面で溝およびピットが検出された。

溝の出土遺物からは13世紀後半から14世紀前半頃までの遺構とみられる。第3調査区付近では、他調査区に比べて地盤面標高が高く、周辺地と1mほどの比高が存在したことが確認できる。平坦面の面積は東西10mほどの比較的小規模なものとみられる。ただ、断面図第27-2・28層は溝・ピットと併存して堤または小規模な土壘状に機能した可能性もある。今後の調査課題であるが、同地点に中世前半の小規模な居館または防御施設が存在した可能性も考えられる。



第192図 2012-4次 第2調査区遺構平面図



第193図 2012-4次 第3調査区遺構平面図

(4) 出土遺物 (第194~198図)

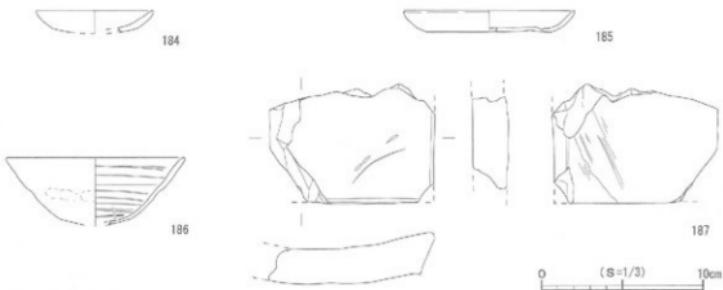
(a) 第1調査区盛土下層

盛土中および盛土上遺構からは遺物が出土しておらず、いずれも盛土下面遺構からの出土である。

ピット3出土 186は土師器皿である。褐色系胎土のものである。底部外面に指押さえを行い、口縁部外面は横方向のナデにより仕上げる。千喜良分類c類IV-1~V-2期、13世紀後半前葉頃から14世紀後半後葉頃のものに類似する。

ピット3出土 186は瓦器椀である。ややとがらせ気味に口縁端部をおさめる。内面のミガキ幅は狭く、ミガキ単位間の幅は広い。欠損により底部内面のミガキは不明瞭である。外面は体部中ほどに指押さえ痕跡が認められ、口縁部に横方向のナデを行なう。樟葉型もしくは楠葉系瓦器椀のIV-3期・14世紀前半頃のものである。

ピット4 185は褐色系の胎土の土師器皿である。摩耗により調整細部は確認しにくいが、内面を平滑に仕上げ、口縁部外面に横ナデによる凹凸



第194図 2012-4次 第1調査区出土遺物

が残る。千喜良分類c類のうちIII-4期、12世紀末～14世紀初頭頃のものに類似する。盛土以前の整地による削平面に張り付いて出土しており、混入品とみられる。

187は平瓦広端部から側縁端部片である。硬質だがやや焼成不良で灰白色を呈する。凸面側の調整は荒く、糸切り痕跡を残す。

(b) 第2調査区出土遺物

第2調査区では主に郭盛土下面の溝および郭(土壘状遺構)と同時併存の可能性もある土坑で遺物が多く検出された。

郭盛土下面溝出土 188は瓦質土器深鉢の口縁部とみられる。中世後半のものである。近隣では16世紀後半代の津田城遺跡で検出されるものの、年代の詳細は不明である。

190は瓦質土器羽釜の鰐部片である。

191は瓦質土器擂鉢の口縁部である。端部内面に、ナデ等により明瞭な平坦面を形成している。佐藤編年E期、近江編年5期にあたり16世紀前半から第3四半期までの時期幅をもつものである(近江1994、佐藤1996)。

192は瓦質土器擂鉢の底部片である。外面の調整は不明瞭になっているが、縦方向のナデにより仕上げられる。内面には、櫛状の工具により、1単位あたり10本の擂り目が施される。191の底部となる可能性の高いものである。

以上の遺物のうち、最新の年代を示す瓦質擂鉢の年代から溝の埋没時期は16世紀前葉から中頃以後のものと考えられる。同時に、この溝埋土上に構築された土壘状遺構(郭)の盛土は、16世紀前葉から中頃を遡るものではないことが確認できる。

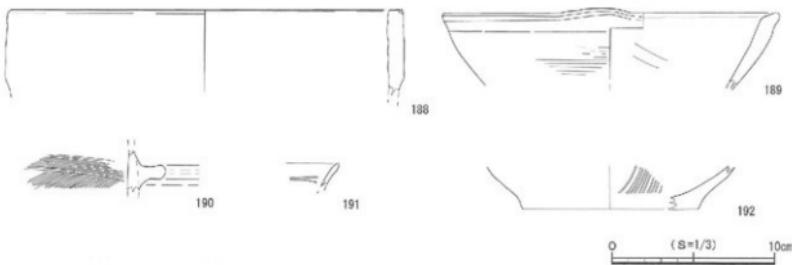
土坑出土 調査区北端で検出されたもので場などの可能性も残るものである。遺物小片が大量に埋上中に含まれていた。これらは上層から下層までに分散して検出された。器種ごとに記述する。

瓦器片は上層から下層まで含まれていたが、いずれも小片であった。

193・194・196はいずれも口縁部片で、端部をやや尖らせ気味におさめるものである。外面を横方向にナデて、内面に省略化されたミガキを施す。

198・197は口縁部から体部まで比較的良好に残るものである。製作技法自体は193・194・196と同様のものである。以上の瓦器片は、楠葉型もしくは楠葉系瓦器碗IV期に属するものであり、おおむね13世紀後半から14世紀前半頃のものである。出土遺物の中ではもっとも古のものである。土坑自体の時期を示すものではなく、混入品とみられる。

土師質土器は小皿が多く出土している。200・201は薄手で口縁部をとがらせるものである。胎土は褐色系のものである。千喜良分類c類にあたり、その中では13世紀後葉頃のものに類似する。



第195図 2012-4次 第2調査区盛土下面溝出土土器

199 も褐色系の胎土で、形態から千喜良分類c類に含まれる。その中ではおおむね12世紀後半から13世紀代頃のものに類似する。

208は褐色系の胎土のものである。小片であるが、千喜良分類c類のうち、14世紀前半前葉頃のものに類似する。

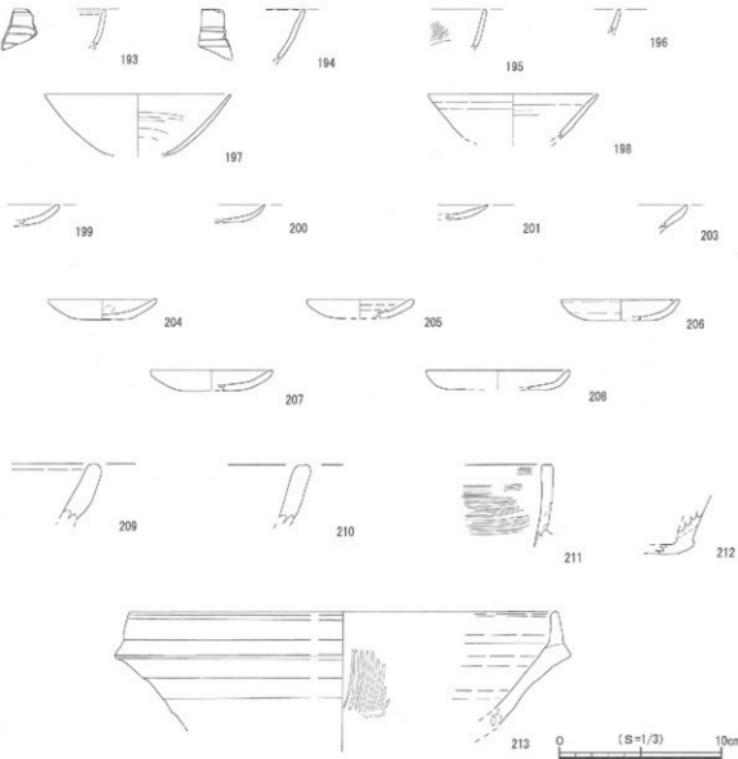
204・205・207はより比較的残存状況がいいものであり、小型化した小皿である。黄橙色系の胎土で、千喜良分類t類、16世紀前半頃のものとみられる。203も同様のものとみられる。

211は瓦質羽釜の口縁部片で、鋤部の剥落痕跡を

伴う。外面は横方向にナデ、内面に横から斜め方向のハケメ調整痕が残る。河内・和泉型で、直立する口縁部形態と鋤部の位置から、おおむね16世紀頃のものとみられる（鋤柄1995）。同様の破片がもう1点出土する。

212は中～大型の瓦質土器鉢類の底部片である。209は丸い口縁部片で、瓦質土器鉢類の口縁部とみられるが詳細不明である。

陶器類は、213の備前掘り鉢口縁部が下層から出土している。1単位あたり9本の掘り目を櫛状工具により施しており、やや摩耗する。口縁部形



第196図 2012-4次 第2調査区土坑出土土器

熊から15世紀中葉頃のものと考えられる（乗岡2001）。

瓦は平瓦（215・216）・丸瓦（217）・雁振り瓦とみられる道具瓦片（218）が検出されている。中層から下層での出土である。平瓦は凸面側の調整が荒く、216など糸切り痕を残す。

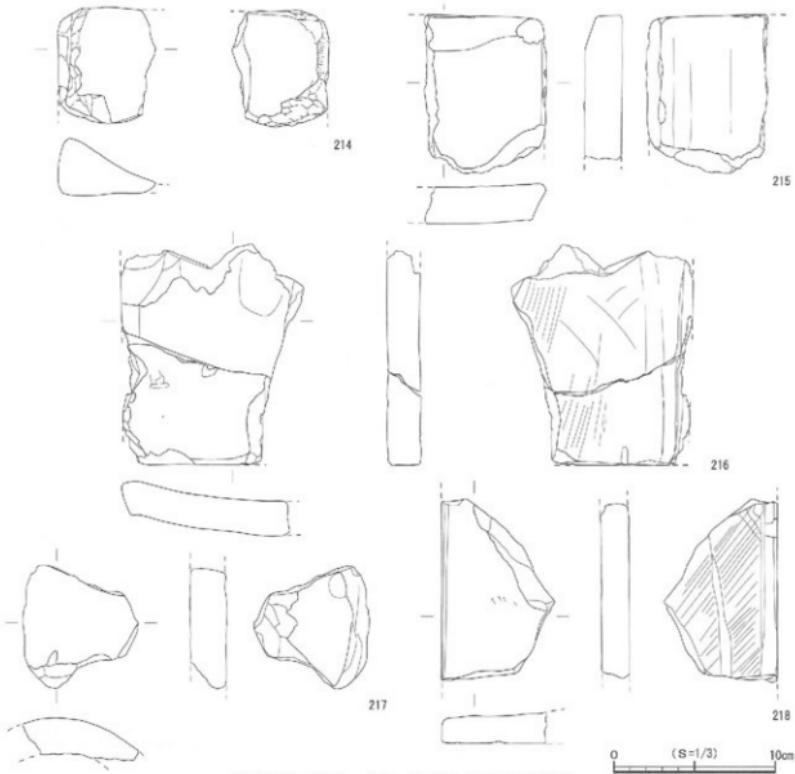
以上のように、遺物の年代は14世紀頃まで遡りうるが、最新相の遺物はおおむね16世紀代に下るものであり、この前後に埋没したものとみられる。遺物から埋没年代の詳細を決められず、土器状遺構（郭）と併存したか否かは、遺構の規模・

形態等を確定した上で行う必要がある。

(c) 第3調査区盛土下層遺構

盛土中には瓦器梶片小片が含まれていたが図化しうるものはなかった。盛土下面遺構の構より遺物が出土している。

219・221はともに口縁端部をややとがらせ気味におさめる瓦器梶口縁部片である。219は内外面ともにミガキが認められず、外面はナデの痕跡のみが認められる。221は幅の狭いミガキが内面のみに施され、外面は横方向のナデにより仕上げ



第197図 2012-4次 第2調査区土坑出土瓦



第198図 2012-4次 第3調査区出土遺物

られる。小片であるが桶葉型または樟葉系の瓦器
椀IV期のものに相当するとみられ、13世紀後葉
から14世紀前半頃までのものとみられる。

220は土師器小皿の底部片である。おおむね中
世のものとみられるが、詳細は不明である。

以上の遺構出土遺物からは、第3調査区の小高
い丘上遺構群の年代を13世紀後葉～14世紀前半
頃に位置づけられる。

（5）小結

本調査では、本丸池西の郭（土壌状遺構）が地
盤層上に盛土して形成されたことを確認できた。
その東半では厚さ約1m程度、西端では0.2m前
後と東側で厚く盛られていた。その層相からは周
辺の堀の掘削や郭の形成に伴う切土と連動して構
築された可能性が高い。郭上面遺構としては、第
1調査区で南北方向の区画を形成する溝を検出し
た。これは築地を伴ったものと推定される。また、
郭と併存した可能性のある遺構として室の可能性
が考えられる土坑を検出した。

郭形成の年代は盛土下面遺構との関係より、16
世紀の中頃から後半頃のものと考えられる。また、
本調査でも明確な改築の痕跡は認められなかつた
ことからも、私部城全体の築城の中で一連で形成
されたものと考えられる。郭の形態は次項で他の
調査成果とあわせて推定する。

また、郭盛土下層では、ピット群や溝とともに
中世遺物も検出された。土壌構築以前に近辺に南
北朝期ごろから集落域が存在したと判明する。ま
た、最も新しい年代の遺物から16世紀前半から
第三四半期頃の間に埋没したものとみられる。

第4項 本丸池西の郭（土壌状遺構）の 調査成果

（1）郭構築以前の集落域

本丸池西の土壌状に残存する地上遺構周辺を
調査する中で、その盛土下面で13世紀後葉頃まで
遡りうる集落域を確認した。郭構築以前の旧
地形に関する成果は断片的ながら、現在残る郭
東端の2012-4次第3調査区付近を東端とする
T.P. 26.0m前後、推定10m四方ほどの高所が存在
し、その周辺に集落域が形成されていた。この周
辺では小片で少量ながら平瓦片なども出土する。
転用品の可能性もあるが、周辺に寺院が所在した
ことをうかがわせる。小規模な調査のため詳細な
変遷は明らかではないが、郭形成時点まで、溝な
どの遺構形成は続いているものと考えられる。

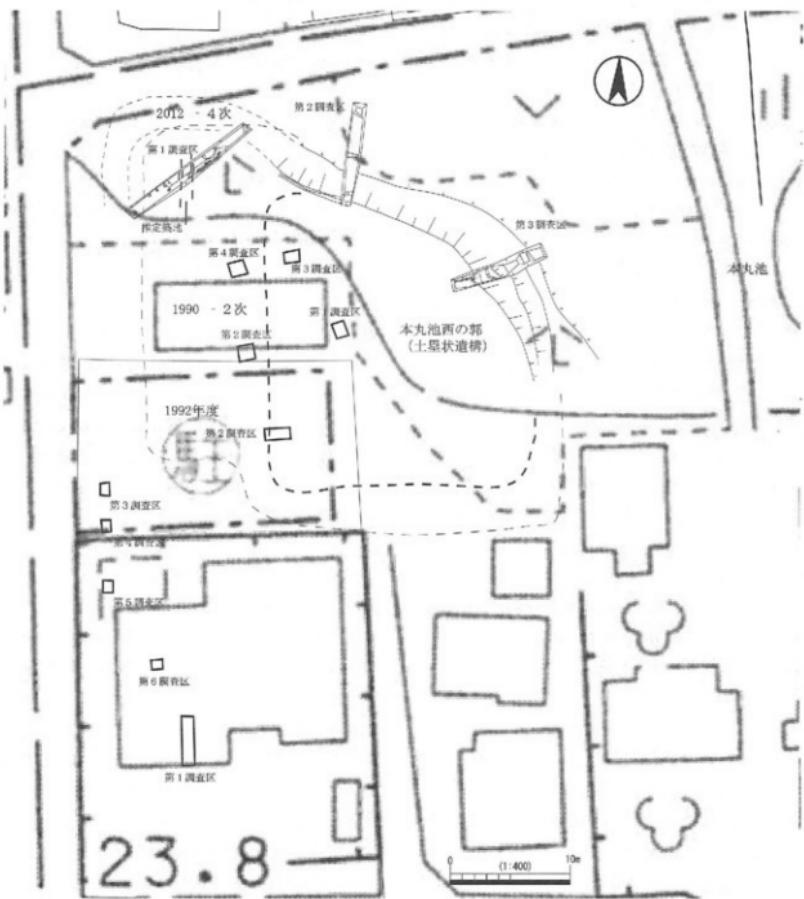
（2）郭（土壌状遺構）の形態と年代

昭和初期の航空写真・測量図から、現在の土壌
状の土壌状遺構が本来は郭であったことが確認でき
た。これまでの調査において断片的ながらその
盛土痕跡を検出している。これまでの調査成果か
ら、東半にT.P. 27.0m前後の標高の高い不定形の
平坦面が存在し、その西側に標高T.P. 26.0m前
後で南北に長い長方形の平坦面が張り付くことが
確認できる。またその低い平坦面上には、溝また
は築地による南北方向の区画が存在した。この付
近には現在の南北道路設置前の昭和23年航空写
真から竹藪が途切れる地点が確認できる。本丸池
西の郭は郵便局付近の郭とは連続せず、この付近

に推定幅10m前後の低地が存在した。この低地部に通路または堀などの遺構が存在したものとみられる。先述の南北の溝または築地がその周辺に存在することからは通路として機能していた可能性が高いものと考えられるが、今後の調査課題となる。

これらの郭の形成は、盛土下面遺構との関係よ

り16世紀代の中でも中頃から後半頃のことと考えられるようになった。それ以後の改変痕跡などが認められないことや、検出された溝が城中心部と同じく南北方向をとること、さらに郭形成に必要な盛土を確保するために相当量の切土も必要であることを考慮すると、私部城中心部の遺構群と一連で形成されたものと考えられる。



第199図 本丸池西の郭（土星状遺構）平面合成図

第11節 郵便局付近の郭の調査

第1項 1986-1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

私部城二郭西の平坦面よりさらに西に位置する。昭和23年の航空写真や、昭和36年の航空写真・測量図をみると同地点には標高27mほどの郭状の高まりをつくる歴が確認できる。残念ながら、この調査時点ではすでに削平されており、詳細な記録は残されていない。

現在の交野郵便局庁舎の増築工事に先立ち実施された。これまで未公開となっていたためここで報告する。



第200図 1986-1次 調査地位置図

調査地を東西に横断するようにA・B・Cの3つの調査区を設定した。A調査区は南北幅1.1m、東西長25mの東西方向に長い調査区である。残りの2調査区は、A調査区と並行に、調査地の北端に設定された。B調査区は南北幅0.8m、東西長3.0mである。C調査区は南北幅0.8m、東西長10.0mである。

(2) 層序 (第201図)

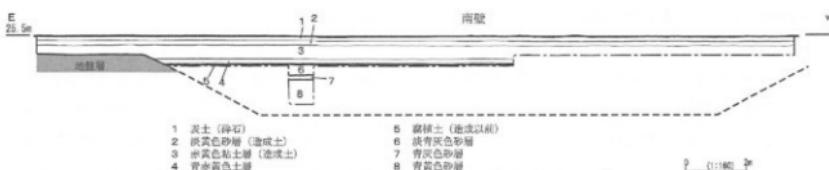
(a) 現代表土へ造成土

第1層はじやり石を含む現代整地土である。

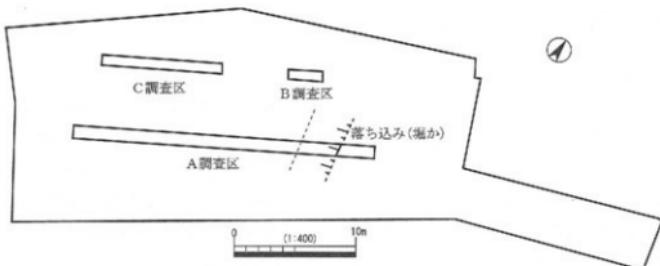
第2・3層はほぼ水平に堆積する造成土である。第3層下面で調査区東端では地盤層が堆積するが、それ以外の箇所では4層が堆積する。調査所見によればここまでが造成土とされる。

(b) 谷もしくは堀埋土

第3・4層の下面で地盤層が露出していない範囲では、後述のように谷状に落ち込む地盤面上に第5～8層が堆積する。注記や写真などから埋土の状況をうかがうと、腐植土や青灰色系の砂層のほかに青・赤・黄色の土層があり混じる層が存在している。写真から4層の状況を確認すると、地盤層由来の土塊や青灰色の粘土層の入り混じるブロック土であることがわかる。この層相からは、人為的に埋没させられたものである可能性が高い。



第201図 1986-1次 A調査区南壁断面図



第202図 1986・1次 調査区平面図

同層は、B調査区・C調査区でも同様に検出されていることからその規模を推定すると、自然の谷もしくは堀の埋土と考えられる。

(c) 地盤層

地盤層の層相について記載はないが、写真観察からは、黄褐色のシルトもしくは砂層とみられる。A調査区の東端では第3層下面で地盤層が露出するが、西へ3.5m付近の地点で大きく落ち込む谷地形が生じている。

(3) 遺構

第3・4層下面で確認された谷地形に堆積する青灰白の粘土・シルト・砂は、B調査区・C調査区でも確認された。このことから、この谷地形は少なくとも幅20m以上のものである。南北方向に延び、深さは2m以上と推定される。

この地形の位置づけをさぐるために、周辺地形を昭和36年の地形測量図からみると、同地点の北側付近から、北東方向に向かって広がる谷筋が確認できる。本調査で検出された谷地形は、この谷筋に連なるものとみられる。この落ち込みは、近世以後の地籍図等からは確認できないものであることから、近世には埋没していることがわかる。

その堀状の地形として復元でき、私部城段階に機能した可能性も考えられる。

(4) 出土遺物（第203・204図）

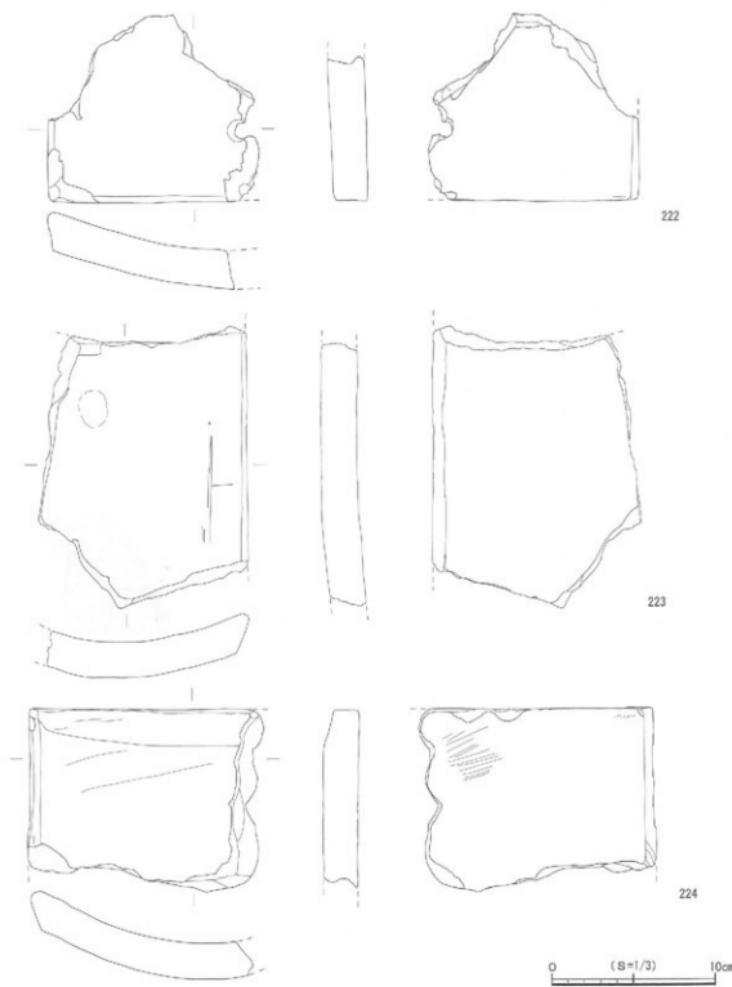
調査地付近には、近現代の廃棄物も多く認められたが、C調査区にて、一部中世に遡る瓦が検出された。

第203・204図は平瓦片である。厚さが2cmから2.5cmほどである。凹面は横方向または縱方向のナデを行う。224は狭端部である。凹面狭端部の面取り幅は最大で2.3cmと広い。ナデの当たりが弱く布目と糸切り痕跡（コビキA）を確認できる。両側縁にナデによる面取りを行う。小口部の端部は面取りしない。

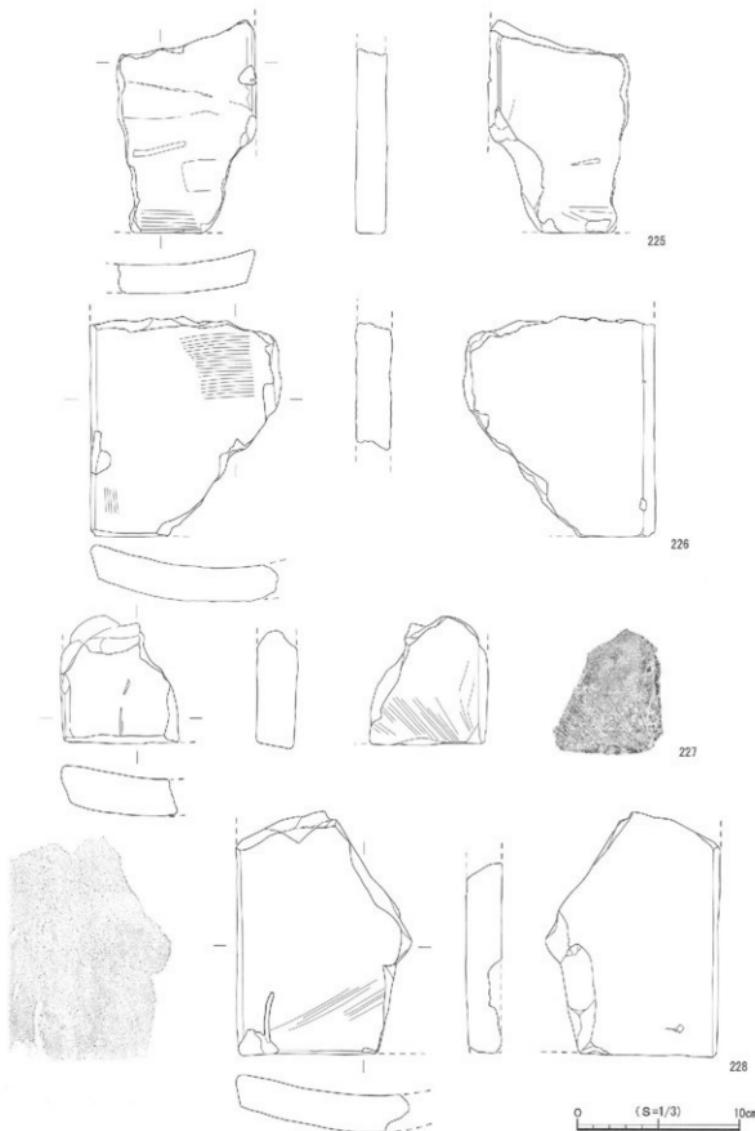
222の中央部に円形の釘孔が認められる。凹面側の直径が1.2cm、凸面側の直径が1cmである。凸面側の穿孔周縁に粘土の隆起がみられるのにたいて、凹面側の周縁部はわずかに凹む。穿孔の径と、穿孔周縁に認められる粘土の凹凸の状況から、凹面側に竹管状の工具を当てて押し込み穿孔したものと考えられる。

(5) 小結

郵便局付近の郭の西側にめぐる堀状の地形の一部を検出した。その一方で、本来の郭の部分は既に削平されていた。出土遺物では、近現代の遺物に混じるものの中世瓦が出土していることが注目される。



第203図 1986-1次 C調査区出土遺物



第204図 1986-1次 C調査区出土遺物

第2項 2013-2次調査

(1) 地点と調査に至る経過

個人住宅建設に先立ち実施した確認調査である。調査地点は現在の交野郵便局の北に接し、私部城二郭の西に位置する。

第1調査区(5.3 m²)を、建物建設予定地の南端部に東西方向に設定した。ここで、地盤層に掘り込まれた堀の埋土が確認された。この堀は南北方向に延びることが想定されたため、調査地の北端に、第2調査区(5.2 m²)を東西方向に設定し、堀の延長を確認した。

(2) 層序(第207図)

(a) 堀埋土

第1調査区では、現代整地土の直下にあたる現地表下0.1~0.2m(T.P.25.6m)より下層で残存幅5.5mの溝状の落ち込みを確認した(第2~9層)。この溝の深さを確認するため、調査区東端にサブトレーナーを設け、計3地点でボーリング調査をおこなった。この結果、溝埋土と地山層の切り替りをT.P24.1m付近で確認した。堀の埋土は、



第205図 2013-2次 調査区位置図

周辺の地盤層に由来する黄褐色から灰色のブロックを多量に含む。

第2調査区でも現地表下0.4mまで掘削し、第1調査区と同様に、現代整地土の直下にあたる現地表下0.1~0.2m(T.P.25.6m)より下層で残存幅5.5mの掘跡を確認した(第4~8層)。計3地点でボーリングを行い、溝埋土と地山層の切り替りをT.P23.1m付近で確認した。

堀の埋土は、周辺の地盤層に由来するとみられるブロックとともに、旧地表層とみられる土壤化層のブロックも多量に含む。溝の埋土となるブロック土は、東側が高く、西に向かって低く傾斜して堆積していることから、堀の東側から埋土が供給されたと考えられる。

(b) 地盤層

黄褐色のシルト質粗砂から構成される。本来の地盤層の切り替わりを第10~11層で認めることができる。堀埋土はこの切り替わりを切ることから、一定の切土を行うことによってこの堀が形成されたことがわかる。



第206図 2013-2次 調査区平面・断面合成図

(3) 堀の構造と年代

堀の規模 第1・2調査区平面で連続する堀跡を検出した。幅5.5mほどで南北にのびる。

堀の底面構造 底面は南側の第1調査区から第2調査区に向かって低くなる。底部形状も異なる。

第1調査区で確認された溝の深さは約1.5mで箱堀とみられる。第2調査区で確認された溝の深さは約2.5mで、薬研掘りとみられる。

両者で段差があることは間違いない、鳥帽子形城跡で確認された堀内障壁のような構造をとるものとみられる。なお、底部の堆積状況からは空堀であったとみられる。

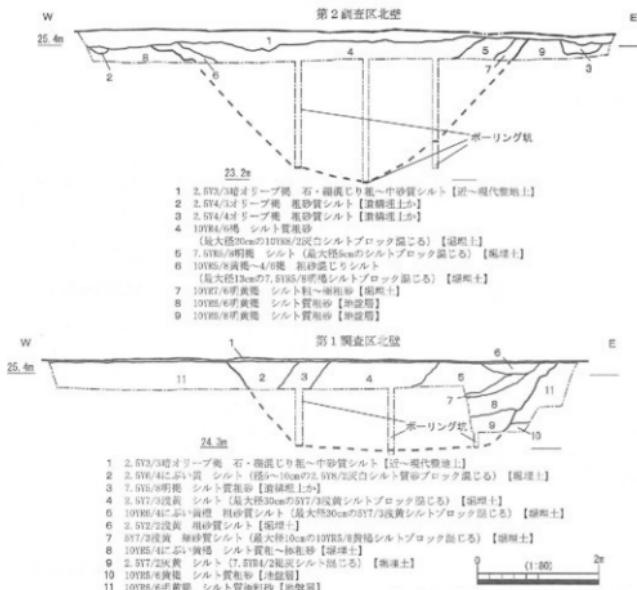
土壘の可能性 堀は、地盤層や土壤化層由來のブロック土により埋没しているが、これは堀の東側から供給されていた。堀を埋没させる土量の供

給元として、土星が存在した可能性が高い。

年代・性格 出土遺物は認められなかつたが、近世以前のものであることは確実である。機能時堆積層は不明瞭であり、ほぼ廃絶時のブロック土により埋没していた。存続期間は短いものと考えられる。また、堀の方向軸は二郭と一致するものである。こうした構造や存続時期をふまえると、私部城に伴うものであると推定される。

(4) 小結

堀内障壁を伴う可能性の高い堀跡を検出した。その構造は人為的なものであった。出土遺物は認められなかつたが、方位・堆積状況などから、私部城域にめぐらされた内堀のひとつと考えられる。



第207図 2013-2次 調査区北壁断面図

第3項 郵便局付近の郭の調査成果

(1) 昭和36年航空写真・測量図と調査成果

昭和36年の航空写真と地形測量図を観察すると、現在の交野郵便局付近に、26.0m以上の高さの高台が存在することを確認できる（挿図写真1・第209図）。1986・1次調査ではその西に堀または自然の谷地形がめぐっていたことが確認できた。さらに2013・2次調査では、高台の東に同じく空堀が存在したことが確認できた。いずれの堀または谷地形も、近世段階には埋没していたものとみられ中世段階のものとみられる。方位軸の類似からは私部城二郭と関連して利用されたものと考えられる。



第208図 郵便局付近の郭 東西断面合成図



挿図写真1 郵便局付近の郭

(2) 推定される郭と堀

これらの2つの堀または谷地形にはさまれたこの高台は、私部城段階に南北約70m、東西15～20m、標高26.0m前後の地形を呈していたと考えられる。郭もしくは土壘として機能したものと考えられる。これらの防衛施設の西側には、古道である私部街道が通る。この街道側から攻め込まれた場合の要害として機能したものと推定できる。

また、これらの調査成果からは、私部城域において、依然として堀などの遺構が地下に残存している可能性を示している。その全体像を明らかにするのは今後の課題となる。



第209図 郵便局付近の郭 平面合成図

第12節 私部城西側の調査

第1項 1996 - 1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

商業施設建築に先立ち、確認調査が実施された。同地点は、私部城二郭の立地する中位段丘の北西の段丘上にあたる。調査地の西方には私部街道と呼ばれる古道が通る。おおむね南東から北西へと延び、郡津集落および東高野街道へと続く。

まず、調査地中央部南東よりの地点に東西1.0m、南北1.0mの第1調査区を設定し、現地表下0.6mまで掘り下げた。次に中央部北西よりの地点に2.0×1.0mの第2調査区を設定して現地表下0.7mまで掘削を実施した。

この結果、第2調査区で室町時代の平瓦が検出された。これにより、予定施設物により遺構・遺物破壊の可能性があることが判明した。

第1・2調査区における成果をもとに、基礎による破壊が及ぶ部分を全面発掘調査するために設定したのが第3調査区である。この範囲について、

基礎による破壊が及ぶ深度まで、遺構・遺物の検出を行い記録保存を行った。

(2) 層序 (第212図)

(a) 現代表土

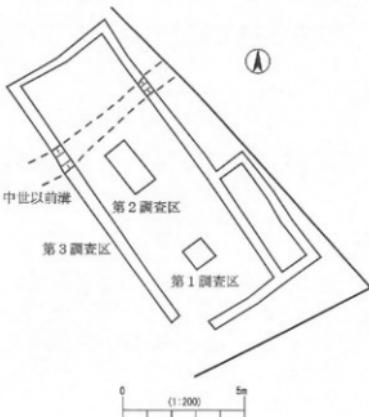
現代表土は第1・2調査区の第1層および第3調査区の第1～3層で認められる。ブロック土が豊富に混じる浅黄色の砂質土である。写真観察により確認できる層相からは耕作土とは考えられない。近隣の地盤層に由来するとみられるブロック土を豊富に含む点は、水道敷設時の堆土を盛土として転用した2012-3次調査地点の現代盛土と類似している。これと同一機会によるものかは不明だが、近現代の盛土である可能性が極めて高い。

(b) 現代擾乱土～旧耕作土

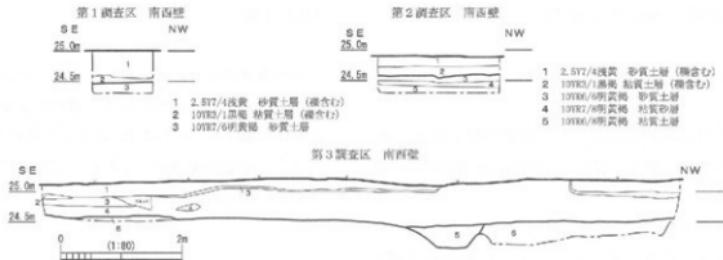
第1・2調査区における第2層は、現代表土下に堆積する黒褐色の粘質土である。現代以前の耕



第210図 1996-1次 調査地位置図



第211図 1996-1次 調査区平面図



第212図 1996-1次 調査区断面図

作土層とみられる。第2調査区でやや高く堆積し、南東の第1調査区に向かって低く堆積する。

これに対して、写真観察からは第3調査区の第4層がこれに対応するとみられる。同調査区ではT.P. 25.3m付近からT.P. 24.0m付近まで分厚く堆積するものと記録される。写真201や、昭和36年測量図などからは、同調査地点の南西に向かって標高がより高くなることがわかる。ただし、同層中に耕作土以外の旧地表土が混同されている可能性が極めて高い。第2調査区で検出された瓦は同層中に伴っていたものとみられる。

(c) 遺構埋土

第3調査区の第5層にあたる。層注記は残されていなかったが、写真観察からは黒褐色のシルトまたは粘土ブロック土が含まれる赤褐色の砂質シルト層とみられる。

(d) 地盤層

第1調査区第3層、第2調査区第3～5層で確認される黄褐色から明黄褐色の砂層または粘質土層である。第3調査区では写真観察から第6層に対応すると判断した。調査地西端から北西の第3調査区および第2調査区でT.P. 24.6m前後と高い標高で確認され、南東側の第1調査区でT.P. 24.4m前後とやや低く傾斜する。

(3) 遺構と遺物

第3調査区のT.P. 24.6m付近の地盤面上で、幅1.2m、深さ0.4mほどの溝を検出している。全長は不明ながら少なくとも10m以上になる比較的長い溝である。

溝の規模と形態は、私部城跡2012-2次調査区で確認された区画溝に類似する。これは私部城以前の14～15世紀頃の中世私部の集落の中心域に伴うものである。

また、本調査区の溝は南西から北東に延びる。この方位軸は同地点の西を通る私部街道を90度振った方位に近い。このことから、私部街道を基軸として設定された溝である可能性が高い。私部城中心域に認められる南北軸とは異なる。

このような溝の規模や構造および方位軸からは、私部城域に伴うものというよりは、私部城以前の中世私部の集落域に伴うものと判断できる。

(4) 小結

地盤高を確認し、旧地形の推定材料が得られた。また、残存部で幅1.2m、深さ0.4mの溝を確認している。私部城以前の中世私部の集落の存在を示すものとみられる。室町時代の瓦が出土したと伝えられるが、集落域に伴うものか、私部城期のかは今後の課題となる。

第2項 1993年度調査

(3) 小結

(1) 地点と調査に至る経過

歯科医院建設に先立ち、確認調査を実施した。調査地は私部城の立地する中位段丘の西端に位置する。

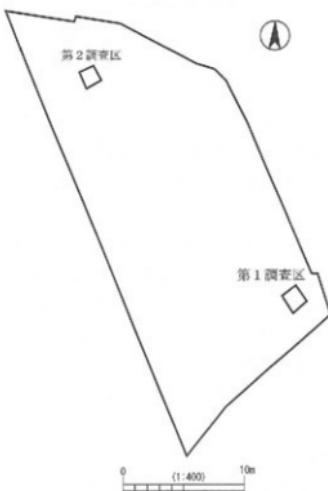
調査地の北端に東西1.5m、南北1.5mの第1調査区を、南端に東西1.5m、南北1.5mの第2調査区を設定して掘り下げを実施している。この結果、本発掘調査は実施していない。

(2) 層序と遺物（第215図）

現代表土は現代盛土で、両調査区で認められる。両調査区第1層は旧表土で、南側の第1調査区で高く、第2調査区で低く堆積する。その下層に旧表土の第1層が堆積する。第1調査区第2～4層は、黄褐色系の粘土・シルトからなる地盤層が認められる。これに対して、第2調査区第5層では、均質なオーリープ褐色シルト層が堆積しており、やや様相が異なる。溝・土坑などの遺構埋土を確認していたものとみられる。第2調査区の第1・5層で瓦・土師器小片が出土していることからも裏付けられる。

内容を確認しきれていないものの、中世以前の遺構が存在したと認められる。遺物出土量も少ないが土師器・瓦片を含んでいたことも注目される。

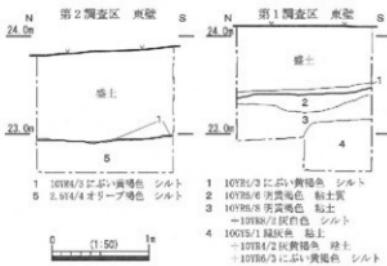
また、地盤層を確認しており、旧地形の復元の手がかりを得られた。



第214図 1993年度 調査区平面図



第213図 1993年度 調査地位置図



第215図 1993年度 調査区断面図

第3項 2006-1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

住宅建設に先立ち、確認調査を実施した。調査地は交野郵便局の西に位置し、私部街道の屈曲部に接している。

調査地の南端に、南北1.1m、東西2.7mの調査区を設定した。重機により現地表下0.9mまで掘削を実施した。

(2) 層序 (第218図)

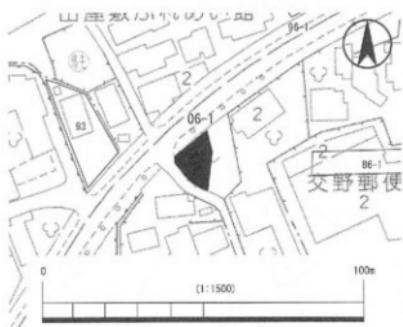
第1層は黄灰色の砂質土であり、0.6m堆積する。近現代の盛土である。

第2・3層は溝埋土である。地山由来のものとみられるブロック土などで埋没する。

第4層が地盤層に相当する。

(3) 遺構

遺構として地山面上で溝1条を確認している。深さは0.4m、推定幅は約2mの幅広の浅い溝である。出土遺物は検出しておらず、年代は不明である。遺構の方角は私部城中心域の南北軸に基づいていたものではないとわかる。私部城築城以前もしく



第216図 2006-1次 調査地位置図

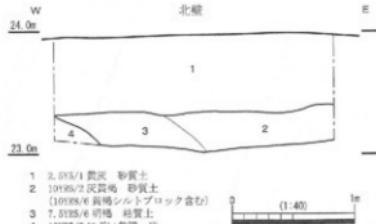
は、近世以後の私部集落に伴って掘り込まれた溝とみられる。旧私部街道に伴う側溝の可能性もある。

(3) 小結

溝を1条検出したが、私部城中心域の堀跡とは規模・方位ともに大きく異なっていた。私部城築城前後の集落域に伴うものとみられる。また、地盤層を確認し、旧地形復元の手がかりが得られた。



第217図 2006-1次 調査区平面図



第218図 2006-1次 調査区断面図

第4項 私部城西側の調査成果

(2) まとめ

(1) その他の調査等

同地周辺ではその他に1987年度調査として、個人住宅の建設に伴い確認調査を実施した。調査地点は、私部城の立地する中位段丘の北西の突端部にあたる。現地表下50cmで地山層を確認したが、遺構・遺物は検出されていない。

また、これらの調査地点のいずれかもしくはその周辺にて、鉄滓、羽口の小片が出土している。近世の棟瓦とともに格納されているものであるが、出土状況は不明であり、羽口小片と鉄滓が中世まで遡る可能性も残る。羽口はごくわずかに残るものであり、全長などの形態がわかるものではない。

私部城西側で行われた発掘調査は希薄であり、北西部に限定されている。ただし、限定された調査とはいって、確実な中世の遺構は極めて少なく、幅の狭い溝がいくつか確認されるのみであった。遺構の密度は、私部城中心部と比べて希薄であったと考えられる。

中世の溝に関する構造や、方位軸からは、私部城の防衛に関わるとみられるものは認められなかった。また、遺物に関しては中世瓦が出土することが注目されるが、その量は少ない。

同地点の立地や標高の高さからは、今後城域に関連する遺構が確認される可能性も残るもの、これまでの調査成果を総合すると、現状で私部城と関連づけて捉えることはできない。



第219図 私部城西側平面合成図

第13節 私部城北東の試掘調査

第1項 試掘 2010 - 3次調査

(1) 地点と調査に至る経過

私部城本郭及び三郭の北東には、東西に延びる開拓谷と段丘が入り組んでいる。谷地形については明確な折れを伴う水路である百々川が通る谷筋をはじめとして、堀としての機能が推定されてきた。段丘の高まりについては私部城中心域と関連する可能性も示唆されていた(中井 1982 ほか)。

同地周辺は字「城ノ二」の北東端にあたる。またその東には「行殿」の地名も残る(20頁)。この地名の由来は城域と関連付けられるものではないが、他地域で城との関連が示唆されることが多い「殿」の字があてられる点が注目された。地形・地名から城域との関連が想定される地点であった。

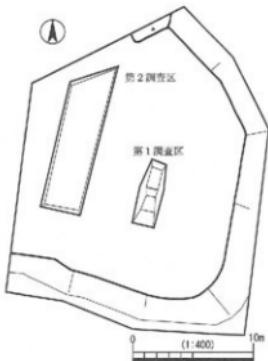
ただし、同地周辺では遺物散布は認められず、周辺の工事立会などにおいても遺物・遺構が確認されることなく、周知の埋蔵文化財包蔵地としての私部城の範囲には含まれてこなかった。

本調査は、宅地造成実施に先立ち試掘調査を実施したものである。現在の百々川が流れる谷筋より北側の中位段丘上に位置する。同段丘の中では高所にあたり、本郭・二郭中心部に匹敵する標高であった。そのため、周辺の宅地化が進む中でも、竹林として利用されこれまで宅地化を免れてきた。縄張り研究の成果もふまえ、同地点の立地と地形から私部城に関連する遺構・遺物が確認される可能性があったため調査を行った。

調査地中央部に、第1調査区を東西2m、南北5.2mで設定し、遺構遺物の有無を確認しながら掘り下げを行った。断面観察により堆積状況を精査した結果、周辺で遺構が検出される可能性があ



第220図 試掘 2010 - 3次 調査地点位置図



第221図 試掘 2010 - 3 次 調査区平面図

ることを考慮して、第2調査区を東西3.4m、南北最大12mで設定し、地盤層上で精査を実施した。

(2) 層序と遺構（第221・222図）

層序は第1・2調査区で共通している。下層まで堆積状況を確認するために掘り下げを行った第1調査区のみ断面図を作成した。

現地表土層は竹林土壤である。0.2～0.3mほどと比較的厚く堆積する。

表上下の第1層は黄橙色の極粗砂である。竹林に伴う搅拌土と考えられた。第1層下面で、ある程度下層を削平しているものとみられる。

2層以下は黄色から黄褐色の砂層である。固く

締まりの良い層であり、地盤層と考えられる。

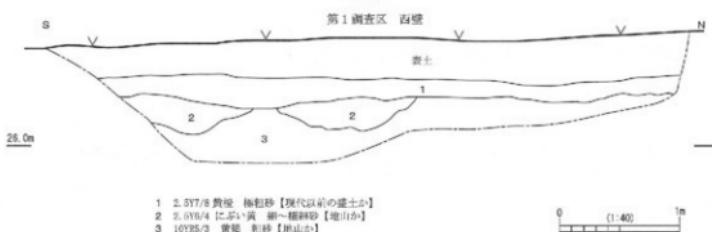
第1調査区では掘り下げ中に遺構・遺物が確認されなかった。第2調査区では、この第1調査区第2層上面に相当する地盤面上で精査したもの、調査範囲内では遺構・遺物は検出されなかつた。

(3) 小結

以上の調査結果から、遺構・遺物は検出されなかつた。また、層序の観察結果から、砦状の高まりが堅固な地盤層により構成されるものであることを確認した。

竹林の土壤として遺構が削平されている可能性を残すものの、遺物の混入も認められなかつたことからは人為的な活動は極めて限的なものであり、居住域として利用された可能性は極めて低いことを確認した。

ただし、同地点が盛土などを必要とせず標高26.0m以上と本郭付近に匹敵するような標高を有していたことは確認された。私部城の機能時段階においても、堀跡と目される百々川および私部城北側の低地帯の中に小島のように浮かぶ地形を呈していたことがうかがえる。顯著な遺構・遺物を残さないことから恒常的な郭とは認められないが、一時的な砦などとして地形を利用した可能性を残すものである。



第222図 試掘 2010 - 3 次 調査区断面図

第2項 試掘 2013 - 1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

同地点は、試掘 2010 - 3 次調査と同じく、私部城の堀跡と目される百々川以北の中位段丘上に立地する。試掘 2010 - 3 次調査地点の立地する段丘と、本調査地点が立地する段丘の間には南北方向に谷筋があり分断されている。現在はこの谷筋に道が通る。

試掘 2010 - 3 次調査地点と同様に、埋蔵文化財の包蔵地外とされる地点であるが、私部城との関連で遺構・遺物が検出される可能性が考えられた。このため、個人住宅建設に先立ち、試掘確認調柾を実施した。



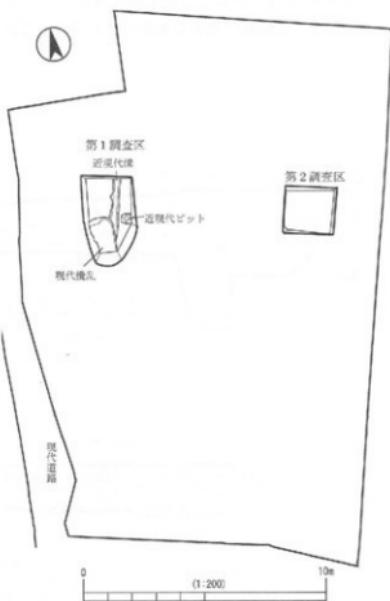
第223図 試掘 2013 - 1次 調査地点位置図

第1調査区は東西最大 2.2m、南北最大 3.8m で設定した。第2調査区は東西 2.1m、南北 2.0m 設定し、いずれも重機で遺構・遺物を確認しながら掘り下げ調査を行った。

(2) 層序と遺構（第224・225図）

現地表下 0.2m 付近まで、現代の整地土及び碎石が堆積する。いずれも建物解体に伴うものである。また第1調査区では、同層下面にて建物基礎による大きな攪乱が残る。

現代整地土および碎石の下層第1層は近現代の耕作土である。上面に残る起伏は歟の痕跡と認められる。同層は近世以降の堆積層とみられる。同層下面で、類似した埋土をもつ第1調査区第2層



第224図 試掘 2013 - 1次 調査区平面図

の溝のほか、ピットが検出されているが、いずれも近現代のものとみられる。

第1調査区第3層、および第2調査区第2層は地盤層直上に薄く張り付く褐色の石・礫混じりシルト層である。床土などの耕作関連の堆積層の可能性も考えられたが、下面に比較的大きな起伏を持つて堆積することからは、近世以前の旧地表土がわずかに遺存したものである可能性もある。

第1調査区第4層、第2調査区第3層は堅固な黄褐色の堆積層で、地盤層である。同地点では、花崗岩が風化したものとみられる白色礫が特に多く混在していた。地盤面の標高はT.P. 26.2～26.3mである。

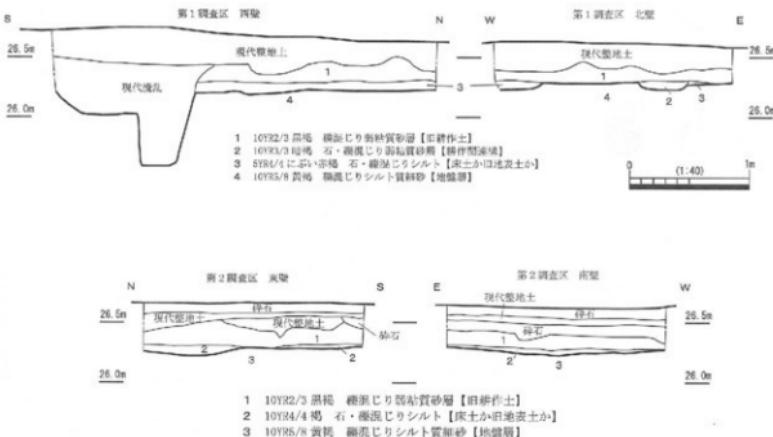
(3) 小結

一定の面積を調査し、地盤面を確認した。その上面で一定面積で精査を実施したものの、これ

までの周辺の調査成果と同様に、遺構・遺物は検出されていない。近現代までの耕作土による削平の可能性も考えられたが、地盤層直上からも遺物が検出されなかった。これらの点からは、同地周辺が居住域として利用された可能性が低いものと考えられる。

ただし、T.P. 26.2～26.3mという高い標高で地盤層が検出されたことは注目される。この標高は、私部城本郭・二郭の最高所に比べれば一段低いものであるが、三郭などの周辺の郭と同等のものである。立地も日々川と低地帯に隔てられるものの、三郭・四郭と比較的の近い地点に立地する。

2010-3次調査地点と同様に、郭や居住域として本格的な改変を行い利用されたものとは認められないが、私部城の機能時段階においては密接に関連するものとみられ、私部城中心城に対して、一時的な砦や陣地として利用された可能性が考えられる。



第225図 試掘2013-1次 調査区断面図

第3項 私部城北東の試掘調査成果

(1) 試掘調査の結果

私部城北東の地域は、字城の端にあたり、その地形からも縄張り研究の中で注目されてきた。ただ、ここまで実施してきた試掘・確認調査においては、私部城北東において、近世以前に遡る遺構・遺物は確認されなかった。これまでも、試掘確認調査以外にも立会調査を実施してきたが、結果は同様のものであり、段丘上では堅固な地盤層を、低地部では現代までの水田層と低湿地帯の堆積層を確認するのみであった。

後世の耕作等により、中世以前の遺構埋土が削平された可能性も考えられる。ただ、私部城域中

心部の調査成果の中では一定の削平を受けつつも遺構が遺存していることをふまえると、私部城北東はもともと遺構が希薄な地点であったとみるのが妥当である。また、旧耕作土中に中世以前の遺物が認められないことからも、同地点における人為的な活動の痕跡は極めて不明瞭であると評価される。

調査成果の累積結果からは、私部城北東の郭状の台地上で、居住などが行われた可能性は現状で極めて低い。近現代における状況と同様に、耕作などの限定された目的に利用され続けてきたものと推定できる。この点では、同様の環境下でも遺構・遺物が多く検出されてきた私部城中心域とは大きく異なっており、区別して位置付ける必要があることがわかる。



第226図 私部塙北東平面合成図

(2) 私部城北東の地形と位置づけ

私部城北東の試掘調査地点においては、遺構・遺物は認められなかったものの、私部城域北東における自然地形の状況については確認することができた。

段丘上は私部城本郭などと同様に堅固な地盤層により構成されていた。その上面に自然地形の起伏も残しながら、近現代まで畑による耕作が行われていた。この段丘上の利用にあたっては、旧耕作土により地盤層が削平を受けていた痕跡は認められるが、人為的な盛土の痕跡は確認できていない。低地部においては、近現代まで水田が展開していた。

こうした自然地形を利用した耕作がいつごろに遡るのかは、試掘調査の中でも年代の定点となる遺物が出土しておらず、定かではない。ただし、私部城の機能段階にも、現況で認められるような低地部の中に浮かぶ高台が存在していたことは間違いない。

縄張り研究の中で示されているように、私部城北東の段丘の標高は三郭などに匹敵するものであり、私部城域の防衛に密接に関わる地形であることも確かである。また、堀跡と目される百々川の北側に隣接していることも注目される。私部城北側を守る天然の要害として機能した低地部の中に島状に浮かぶ砦状の地形は、私部城の防衛にも密接に関わるものと推定される。

私部城の縄張りにおけるこの砦状の地形の重要性は十分に認められるところではある。城をめぐる攻防が起きた時には、重要な拠点の一つとして利用された可能性は十分にある。

ただし、これまでの試掘調査の結果、顕著な遺構・遺物や、土壠盛土・切岸などの痕跡も認められなかつことをふまえると、恒常に私部城と関連した施設などが置かれた地点ではないと考えられる。築城に伴う盛土・切土などの地形改変の痕跡が著しく、遺物・遺構も検出される本郭や二

郭などの私部城中心部とは区別できる。この私部城北東の地点のうち、百々川より北の砦状の地形については、城の範囲外の地域もしくは城の周辺域として捉えるべきものと考えられる。

なお、昭和初期までの航空写真や測量図では、今回の試掘調査地点からみて、百々川をはさんですぐ南にも東西にのびる長方形の畑地が確認できる。これも今回の試掘地点と同様の地形を備えるものとみられる。この地点についてはこれまで試掘調査が実施されておらず³状況は不明瞭である。こうした百々川以南の地形の状況が今後の検討課題として残る。

第14節 三郭～四郭の調査

第1項 1965・1969年度調査

(1) 地点と調査に至る経過

本地点は、私部城三郭から四郭の西端を横断する箇所にあたる。

現在の市道私部城線（旧・交野町道）が竣工した直後の昭和40年（1965）5月、郷土史家の奥野平次氏が、道路により切通された三郭の崖面で、焼けた礎石・土器などを発見した。これを契機とし、昭和44年（1969）に、水道管等の敷設にともない、一連の調査がなされた。町道沿いに、三郭から四郭付近までの断面の情報が記録され、弥生中期の石庖丁・土器類が検出されている。

その成果については交野町より調査書が刊行された（交野町教委1970）。また、交野市史考古編において、弥生時代包含層の再検討がされ、弥生時代の環濠の一部が検出されている可能性が指摘されている（水野1992）。これまでの調査報告を基礎としながら、中世段階に焦点をあてて再整理する。



第227図 1965・1969年度 調査地点位置図

(2) 層序（第228図）

現代表土下の層序を上層から下層の順に記述する。

(a) 三郭・四郭間堀部埋土

堀部では「赤土層」が80cm～60cmの起伏をもつて置かれていた。低地部を埋める盛土と考えられる。その下面には腐食土層が堆積していた。同層は、近現代までの自然堆積層と考えられる。その底部は確認できていない。

また、これと同様に、赤土層および腐食土層が堆積する箇所が三郭上面の東端部に認められる。堀部と同時に埋没した遺構と考えられる。底部に腐食土が堆積する状況からは、堀に関連する溝の可能性が考えられる。

(b) 三郭盛土

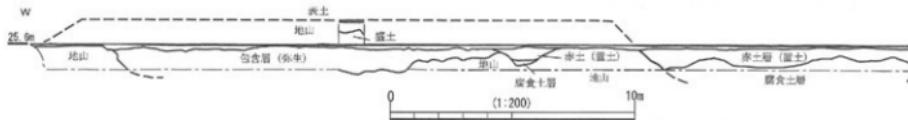
三郭の部分においては表土下で50cmほどの盛土が堆積する。弥生時代包含層上に堆積しており、三郭構築時のものとみられる。

(c) 弥生時代包含層

盛土下面に弥生時代の遺物包含層が深さ1.5m、東西長15mほどの範囲に堆積する。同層については、交野町教委報告においては竪穴住居埋土である可能性が指摘され、交野市史考古編において、環濠埋土の可能性が指摘された層である。ただし、竪穴建物としては長大すぎる。環濠あるいは自然の谷埋土の可能性が考えられる。

(d) 地山層

地山層は三郭及び、四郭の下部で検出されている。報告の中では赤土との記載がある。広く堆積する状況から地盤層と認められるが、本郭などの黄褐色系の地盤と層相は異なるものとみられる。



第228図 1965・1969年度 調査区断面展開図

(3) 遺構

(a) 三・四郭間の堀

調査地東端で確認されている。その残存する上端の幅は12mである。完掘されていないため、深さは不明だが、三郭上面との比高は2m以上あることがわかる。

堀の斜面は約45度と急角度をなす。傾斜面に土壤化層の記載がないことから、堀部の傾斜面が切土で形成され、その面上に新規の土が堆積しない間に堀が埋め戻されたものと考えられる。

(b) 中世遺構

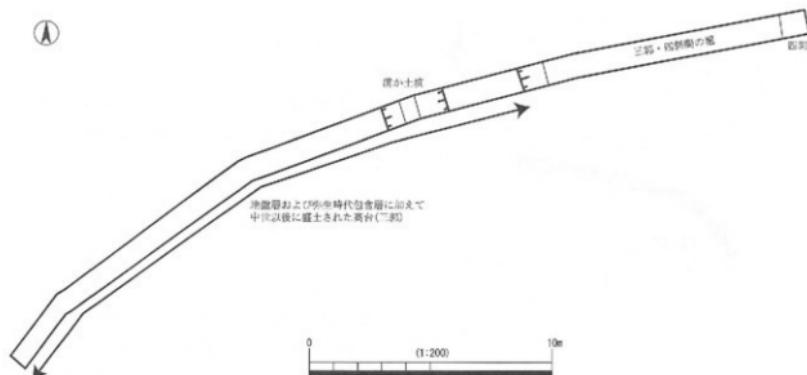
断面図中央で確認できる赤土（置土）と腐食土の堆積については、私部城築城時に盛土されたものと評価されている。私部城以前の集落域もしく

は寺院に伴う溝または土坑と評価できる。

なお、この溝埋土の土層注記からは、三郭・四郭間の堀部埋土と類似することがうかがえる。堀と併存した遺構である可能性も残る。この場合、堀部とこの溝の間に土塁などの地上遺構が存在した可能性も考えられる。

(c) 弥生時代包含層

弥生時代包含層は幅16m、深さ0.9m以上のものである。竪穴建物埋土としては規模が大きすぎる。ただし、人工的な廉濠とするには緩やかな形態である。類似した地形は、弥生時代に存在した谷地形と考えられる。この谷が埋没した上に、盛土を行うことによって、郭を構築していることも確認できる。



第229図 1965・1969年度 調査地平面図

(4) 出土遺物 (第230図)

出土遺物は弥生時代の石器・土器類が多く、弥生時代包含層から出土した（交野町 1970）。

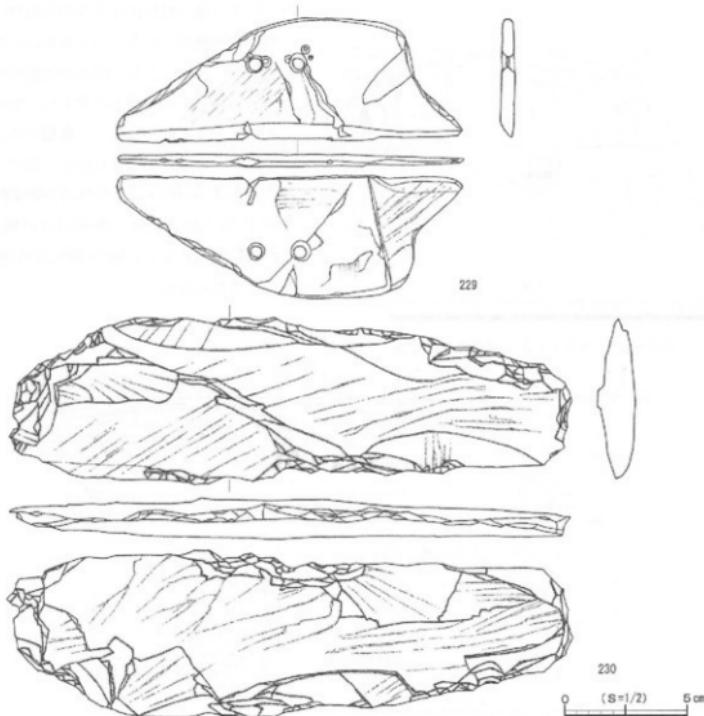
229 は粘板岩製の石庖丁である。230 は粘板岩の板石である。これまで打製石鋤として記述されてきた。使用痕跡が認められないことや、石材の一致からは、磨製石庖丁の未成品である可能性も考えられる。この他に弥生時代中期中頃の弥生土器が出土している。

中世遺物としては火を受けた石と、布目の残る瓦が採集されたと報告されている。

(5) 小結

私部城域における最初の発掘調査であり、三郭から四郭付近における貴重な調査成果が得られた。三郭の構築方法については、地盤面および弥生時代包含層上に盛土を行い郭を形成していることが確認された。また周辺で中世瓦や被熱した石が出土したことも注目される。

加えて、三郭と四郭間の堀の形態を確認している。幅約 12m、深さ約 2m 以上の規模である。堆積状況からは、泥田状か、水堀に近いものと推定される。



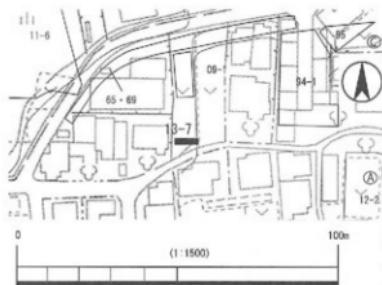
第230図 1965・1969年度 出土遺物

第2項 2013 - 7次調査

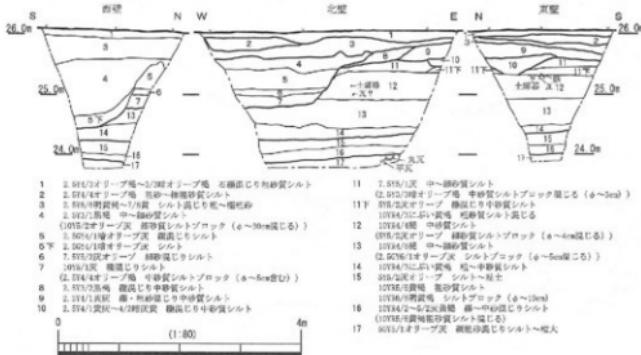
(1) 地点と調査に至る経過

1965・1969年度の調査地点の南に位置する。十数年前まで池が所在しており、三郭・四郭間の堀の残存遺構と考えられていた（中井1982）。この推定堀が屈曲する付近に位置している。

三郭・四郭間の堀の規模と構造については、1965・1969年度の調査である程度の情報が得られていたが、この時確認できていなかった堀の深さ等の状態を確認するため、推定堀跡を横断する位置に調査区を設定した。



第231図 2013 - 7次 調査地点位置図



第232図 2013 - 7次 調査区断面図

(2) 層序 (第232図)

(a) 現代表土～近現代池

現代耕作土下の現地表土下0.2mで、池の堆積層(第2～7層)とそれに対応する旧地表土層(第8～11層)を確認した。近現代遺物のみを含み、近世を遡るものではないことが確認された。

(b) 堀埋土

池の下層で、堀部の埋土を確認した(12～16層)。

このうち上層の第12・13層は水平堆積でブロック土が顕著ではない。耕作などによる擾拌を受けたもので、堀の廃絶に伴うものか判然としない。

確実に堀廃絶に伴うものと考えられるのは下層の第14～16層である。周辺の地盤層の由来の土を含むブロック土が顕著に含まれ、緩やかに東から西へ向かって低く傾斜して堆積する。四郭側から供給された土層と考えられる。このブロック土最下部の第16層から、次の堀の機能時堆積層上部の17層上面で瓦片、陶磁器片が検出された。これらは堆積状況から堀の廃絶に伴い廃棄されたものと考えられる。

(c) 堀機能時堆積層

調査区東端で、灰色のシルト・粘土を確認した。調査区東端で、T.P. 24.0m付近、西端でT.P. 23.9mとやや西に向かって低く堆積する。直上で出土した陶磁器・瓦等の年代観から、同層が私部城三郭・四郭間の堀として機能していた段階の堆積層と考えられる。この機能時堆積層からは遺物は出土していない。崩落の危険があったため、より下層への掘り下げは行わなかった。

(3) 遺構

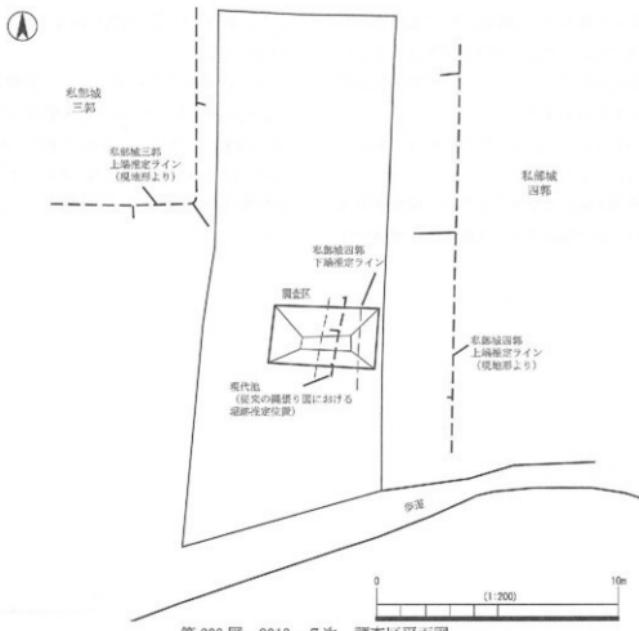
(a) 近現代の池跡

調査区西半の上層で、青灰色のシルト・粘土が堆積する池跡を確認した。縦張り図において三郭・四郭間の堀の根柢とされてきたものである（中

井 1982）。池埋土より近現代以後の遺物のみが出土したことから近現代に形成されたものと判明した。

(b) 私部城段階の堀

私部城段階のものとみられる堀の堆積層は調査区最下層で確認した。堀の上端と下端は今回の調査区では確認できなかった。ただし、今回の調査箇所におさまらないことから、少なくとも10m以上の幅があることがわかる。機能時堆積層はシルト・粘土でやや傾斜をもって堆積するが、堀底施設の痕跡は認められない。1965・1969年度調査成果もふまえると箱堀と考えられる。堆積状況からは、本郭北側斜面と同様に泥田状の堀底であったと考えられる。また、一定量は滞水していた可能性もある。



第233図 2013-7次 調査区平面図

また、堀を埋めるブロック土（第16層）下部から堀埋土（第17層）上部から、丸瓦・備前陶器大皿が出土している（第234・235図）。出土状況から、いずれも堀をブロック上で埋める際にともに廃棄されたものと考えられる。出土遺物から、同堀跡の埋没年代は、16世紀後葉頃のものとみられる。また、堀底の機能時堆積層からの出土遺物が認められないことからは、長期間利用された堀ではないことが推定される。

（4）出土遺物（第234・235図）

いずれも、堀部を埋めるブロック土から、機能時堆積層直上の出土である。

231は備前陶器大皿で、復原径20cmをこえる。内溝する口縁部内面の下方に貼り付けで三角形の段をつくる。豊臣前期の大坂城で出土しているものに類似し（植木ほか1988）、16世紀後葉の年代を与えることができる。堀埋土出土品の中ではもっとも新しい年代のものであり、三郭堀部の埋没年代を示すものとなる。

232は染付の小片である。備前陶器などよりは上層で出土したものである。

丸瓦（第235図）は厚手であるが、製作技法は本郭出土のものと類似する。外面黒色に焼焼かれ

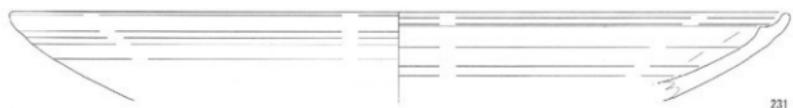
たものである。237は、胴部幅15.1cmで、凹面に棒状の工具による内叩き痕が認められる。茨木市梅林寺所蔵の天文刻銘丸瓦に類似し、16世紀中頃前後の年代を与えることができる。このほかにも平瓦片が數点出土している。出土状況からは、周辺で瓦利用がなされていたものと推定できる。

（5）小結

縄張り図による堀推定の根拠とされた池は近現代のものであったが、その下層で、三・四郭間の堀底面を確認した。その標高は、T.P. 24.0m前後であり、推定される三郭との比高は、2~3mほど、その推定幅は10m以上と大きいものである。堀底面の堆積状況からは、泥田状の掘底か、浅い水堀であったと考えられる。

また、堀廃絶時の堆積層から瓦が出土したことから、同地点付近で瓦利用がなされていたものと考えられる。

さらに堀埋土より検出された陶磁器や瓦類から、その埋没年代を16世紀後葉頃に与えられる。堀の機能時に堆積した遺物は認められなかった。また、堀底の改変等の痕跡も認められず、機能した期間は長期にわたるものではなかつたものとみられる。



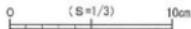
231



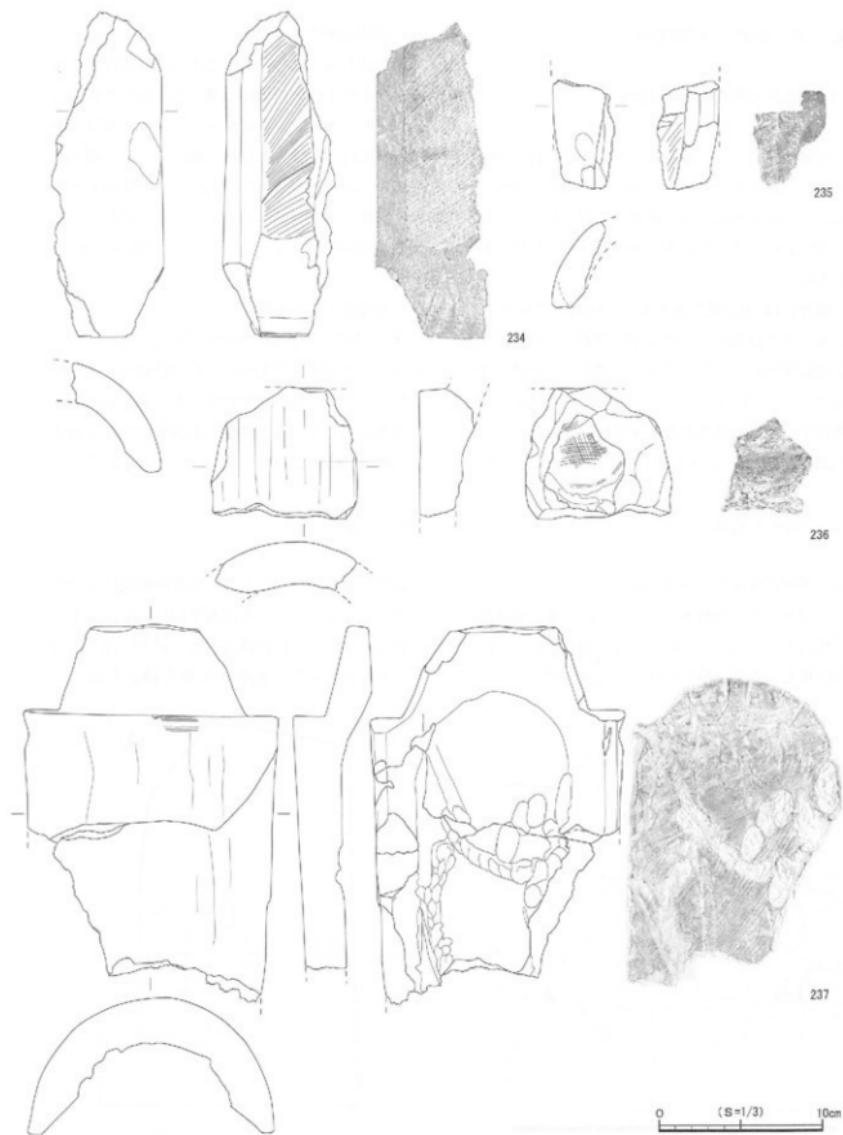
232



233



第234図 2013-7次 調査区出土遺物



第235図 2013-7次 調査区出土瓦

第3項 1994 - 1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

宅地造成に伴い、確認調査が実施された。同地点は、三郭の東の段丘上にあたり、縄張り研究において立地と形状から、四郭とも呼ばれる。近世以後においては、その地形を畑地として利用されてきた。

調査区は、調査地中央を東西に横断する位置に、東端に第1調査区、中央に第2調査区、西端に第3調査区を設定した。これらの調査区の規模は東西に1.5m、南北に1.0mである。その北側に第4調査区、南側に第5調査区を設定した。この2つの調査区の規模は、南北に1.5m、東西に1mである。

(2) 層序と遺構

(a) 近世以後耕作土～現代表土

各調査区で、現地表下30cm～50cmまで盛土層が堆積していた。後述の四郭東の堀部の埋土上にも堆積し、近世以後の整地土と考えられる。



第236図 1994 - 1次 調査地点位置図

(b) 四郭東堀部埋土

第1調査区では、盛土下で河川の堆積作用によるとみられる砂粒の層が堆積すると報告されている。昭和初期の航空写真などで、四郭の東に水田などの低地部が広がる様相を確認できる。第1調査区の下層で確認された堆積は、この低地部の堆積と判断できる。第1調査区付近で、四郭の郭部から、東の堀部への切り替わることが確認できる。

(c) 地盤層～旧表土層

その下層の第2層は黄橙色の砂質土層である。その下の第3層に礫を多く含む明黄褐色土層が堆積していた。第3層が地盤層である。第2層は旧表土と考えられる。第2調査区第3層でピット数基と上器部などの遺物が出土したと記録される。

(3) 小結

限定された調査区ながら、四郭の構築については盛土をほぼ行わず、地盤層を利用していることが確認できる。これは隣接する三郭の状況とは大きく異なる。また、四郭の東端を確認した。



第237図 1994 - 1次 調査区平面図

第4項 三郭～四郭の調査成果

(1) 築城以前の遺構と地形

三郭・四郭の調査では、弥生時代における環濠的な機能を持ったと目される谷地形が確認されている。また、赤土として記される地盤層の標高もT.P. 25.0m前後と比較的低い。三郭付近においては、築城以前には郭以前に高台の地形自体が存在しなかつた可能性が高い。この低地から谷部に後述のように盛土を行うことによって、三郭の形状が形成されたものとみられる。

(2) 郭の形成・形態

三郭中央部の1965・1969年度調査では、地盤層である赤土の上に、1mほどの盛土を行い郭を形成したことが判明した。盛土により郭を形成した痕跡は、2011・6次第4調査区の東端で検出された三郭北西隅においても確認されている。

三郭の中央部と北西隅で共通して盛土が認められることからは、郭形成にあたって行われた盛土量の大きさがうかがえる。これがどこまで及ぶものであったのか、盛土の範囲は今後の検討課題である。

三郭の形態は、おおむね南北方向に向くものであるが、西縁にはやや西寄りに傾きが認められる。

これが後世の改変の影響か、本来の郭形状を反映するのか判然としない。

四郭の調査成果においては、三郭のような顕著な盛土が認められず、地盤層をほぼそのまま利用して郭としたことが判明している。その平面形が他の郭に比べていびつな四角形を呈することからも、地形改変の度合いは他の郭に比べて小さいものと推測される。郭上面に遺構・遺物が遺存することが判明しているが、詳細は不明である。ただ、2013・7次調査において、四郭側から供給されたとみられるブロック土中に瓦や陶磁器が含まれていたことからは、四郭上に瓦を利用する施設が存在したものとみられる。

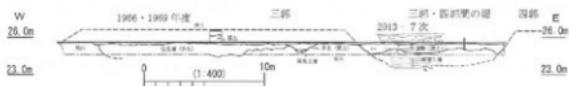
(3) 堀の形状と年代

三郭・四郭間の堀については、幅が少なくとも10m以上である。推定される三郭上面との比高は2～3mほどと大きいものであったと推定される。2013・7次調査成果から箱堀と判明した。底面の機能時の堆積層が青灰色系のシルト・粘土であることから、北側斜面以北の低地帯と同様に、泥田状の地形を呈していたとわかる。また、浅い水堀であった可能性もある。

堀は北端でやや屈曲する箇所がみられるが、全体としては南北にのび、三郭南東隅付近で西へ屈曲し、また南へのびる形態と推定される。南北方



第238図 私部城三郭 南北断面合成図



第239図 私部城三郭～四郭 東西断面合成図



第240図 私部城三郭～四郭 平面合成図

向の遺構は、私部城中心域で特徴的に認められ、同堀が本郭などと一緒に形成されたものであることを示唆している。

2013・7次調査区の掘廃絶時の堆積層出土遺物からは、同堀跡の埋没年代を16世紀後葉頃に求められる。また、堀の改変痕跡なども認められないことや、16世紀以前の遺物が認められていないことからは同堀が長期間機能したものではないことがうかがえる。出土遺物や堆積状況からも、この堀が私部城本郭などの遺構群と同様に、16世紀中頃から後半頃のごく短い期間に機能したものと推定される。

(4)まとめと課題

調査数・面積とも限定的なものであるが、郭・堀の構築状況や、その形成年代などについて一定の成果が得られている。それによって、私部城中心部の本郭と同時期に機能したことが判明してきた。

三郭南半から四郭および堀については、その平面形態などに不明瞭な点も多く残されている。さらに、郭上面の利用状況が今後の検討課題としてあげられる。

第15節 出郭（現・光通寺）の調査

第1項 1997-2次調査

（1）地点と調査に至る経過

現在の光通寺の境内である。私部城域の南東隅に張り出した高台上に立地し、網張り研究から「出郭」としても位置付けられている（中井 1982 ほか）。同地点における住宅建設に先立ち、確認調査された。

なお、これまで 1997-1 次として報告・紹介されていた事例があるが、マーキングミスからおきた誤認である。これまで 1997-1 次とさせていたものも 1997-2 次調査にあたるものである。

調査区は、建設予定地の中央付近に $3.5 \times 1.5m$ で設定され、重機掘削と人力掘削により、1.2m まで掘り下げた。後述の通り井戸を検出するとともに、その周囲にサブトレーナ（周溝）を掘り込み、堆積状況を確認した。



第241図 1997-2次 調査地点位置図

（2）層序（第242図）

(a) 現代表土～近世整地土

現代表土は、第242図第1層に対応する。現在の畠等の耕作土層である。

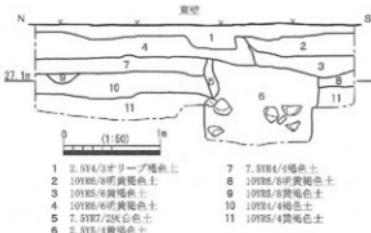
その下層の第2～4層は、後述の井戸が埋没した後の整地土である。現在の光通寺は近世段階に同地点に建築されたものであり、その際の整地土とみられる。特に第4層は地盤層由来とみられる。

(b) 井戸埋土

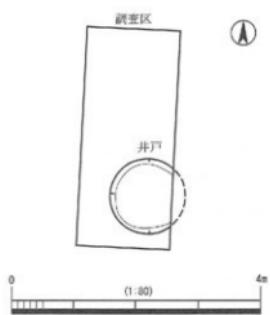
第5・6層を埋土とする井戸は後述の中世以前の堆積層を切り込んで形成されている。後述のとおり多量の石のほか中世瓦などの遺物が含まれていた。

(c) 中世盛土

井戸の掘りこまれた第7層から第11層は、互層になっていること、各層中にブロック土の混入などが認められることから、現況の地形構築に利用された盛土と考えられる。第7層は褐色土層で、同レベルの第8層では地盤層由来のものとみられる黄褐色土が堆積する。第10層は褐色土である。第7・8・10層からは、土器小片が検出されている。また、いずれかの層中から、中世瓦質土器



第242図 1997-2次 調査区断面図



第243図 1997-2次 調査区平面図

片が検出されている。

調査区最下層で検出された第11層は注記では黄褐色土層とされ地盤層である可能性も考えたが、写真観察により黒色または褐色のブロック土が豊富に混入することから盛土と判断できる。

本地点では最下層でも地盤層は確認されなかつた。少なくとも0.6m以上の盛土上に井戸が掘りこまれていた。盛土中より出土した遺物の中では、瓦質土器深鉢片(284)が最も新しく、15世紀中頃のものとみられる。この盛土が施工された年代がこれを遡ることはない。また、盛土を切る井戸出土瓦の年代から、この盛土の年代は中世末に近い16世紀頃に行われたことがわかる。

(3) 遺構

小規模な調査区ながら、直径約1mの井戸を検出した。開発予定の掘削深度以下までは掘り下げていないため、井戸底の確認はしていない。浅くとも2m以上の深さとなる。

先述の盛土をほぼ垂直に切り込んで形成された素掘りの井戸である。拳大から人頭大の石が埋土中から多量に出土したが、石が井戸壁面に積み重ねられた痕跡は確認できない。また、地盤層に混入する規模のものでもないことから、井戸の周辺

で利用されていた石材が、井戸の廃絶時に、他の遺物群とともに投棄されたものとみられる。

ここからは石のほかに、多量の瓦および、瓦を留める際に使われたとみられる鍵・釘の鉄器が出土している。出土瓦を接合した結果、完形に復元できたものはなかった。周辺の建物廃絶時に破損した瓦のみを井戸に廃棄したものとみられる。瓦の年代はおおむね16世紀代のもので、近世瓦は含まれない。中世末までに井戸が廃絶され、周辺の瓦が廃棄されたものと推定できる。

(4) 出土遺物

井戸から軒丸・軒平・丸・平・道具瓦と多種にわたる瓦が多量に出土している。また、サブトレンチ(周溝)掘削時に、土器小片が出土している。

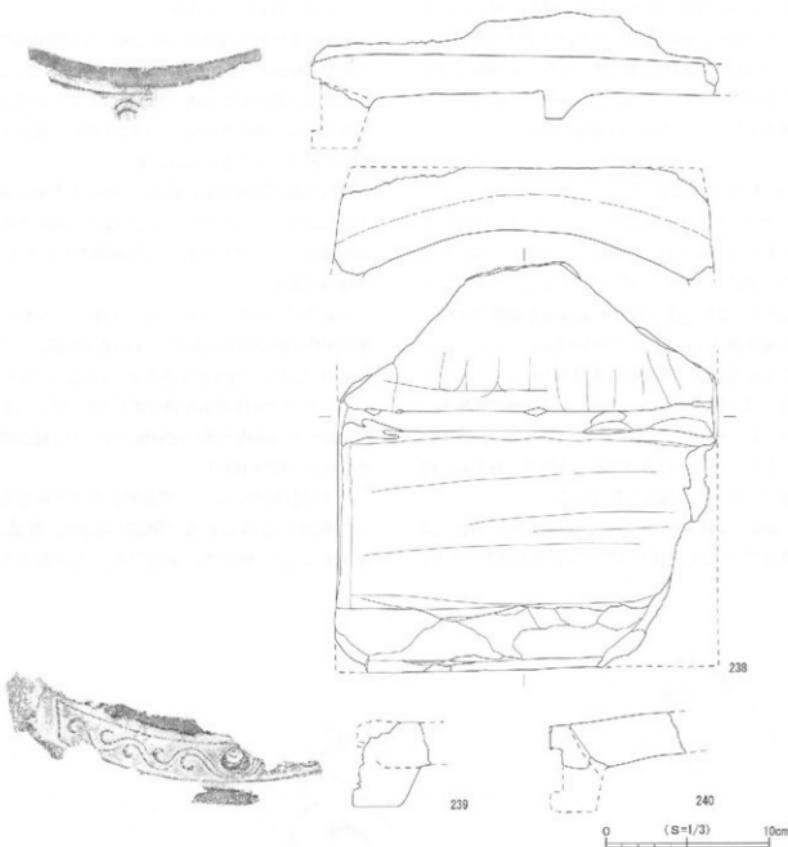
(a) 軒平瓦(第244図)

井戸中から2点出土している(238・240)。また、光通寺境内にて1点採集された軒平瓦もあわせて掲載しておく(239)。

238は滑り止めを備えた軒平瓦で、瓦当面をほぼ損失し、中心の宝珠部と上側の界線のみを残す。宝珠唐草文であったと推定される。

額部の割れ方から、額貼り付け技法によるものであることがわかる(写真図版63)。現況で、接合部に明瞭なカキメは確認できないが、わずかに横方向の凹線が認められカキヤブリにより接合された可能性もある。

平瓦部が比較的良好に残存し、滑り止めを確認できる。凹面側縁には、丸瓦の滑り止めとして機能するひが付属する。凸面に付属する滑り止めは、平瓦部の両側縁までまたがるものである。これは中世奈良の瓦に多くみられることが指摘されている(山崎2008)。いずれも接合面の剥離状況は悪く、カキメ等を施していたか不明瞭である。凸面は基本的に横方向のナデにより仕上げるが、滑り止めと額部の間は平滑であるものの砂粒が横



第244図 1997-2次 井戸出土・採集軒平瓦

方向に引きずられた痕跡も認められることから、板状の工具により、ケズリに近い調整がなされたと考えられる。

堅緘に焼成され、胎土は白色礫を多量に含むものの密である。同様の胎土は交野市内の山岳寺院出土瓦にも認められ、近隣で粘土を採取し焼成されたものと推定できる。製作技法から年代は16世紀頃のものとみられる（山崎2000）。摂津・和

泉地域から広がる顎貼り付け技法と、奈良に多い滑り止め形態を備え、両地域の折衷的な瓦と評価できる。

239は光通寺境内で採集された宝珠唐草文軒平瓦である。顎部剥離面の観察から顎貼り付けにより製作されたことを確認できる（写真図版64）。瓦当上縁の面取り幅は1.2cmほどである。平瓦部の厚さは2.3～2.6cmと幅がある。灰白色の胎土

中に石・礫を多く含む。外面は黒色に焼成されていいる。238 と同様に 16 世紀頃のものとみられる。

240 は瓦当面はほぼ欠損するが、瓦当貼り付けと判明する軒平瓦の破片である。16 世紀頃から遡る年代のものである可能性がある。

(b) 軒丸瓦 (第 245 図)

井戸より 3 点出土している。241 と 243 はいずれも巴文の瓦当面を残すもので範傷の一一致から同范と認められる。直径は 14.4 cm と、やや小ぶりである。243 は丸瓦部との接合面を観察でき、瓦当裏面側にカキメなどの痕跡は認められず、丸瓦広端面側に浅い沈線が数条認められる。こうした貼り付け技法からは、おおむね室町時代後期のものとみられる。

なお、後述の鳥衾の瓦当も範傷の一一致から、同範であることが確認されている。

242 は 241・243 と異なる巴文である。胎土は精良であるが、焼成不良で全面が灰白色を呈する。

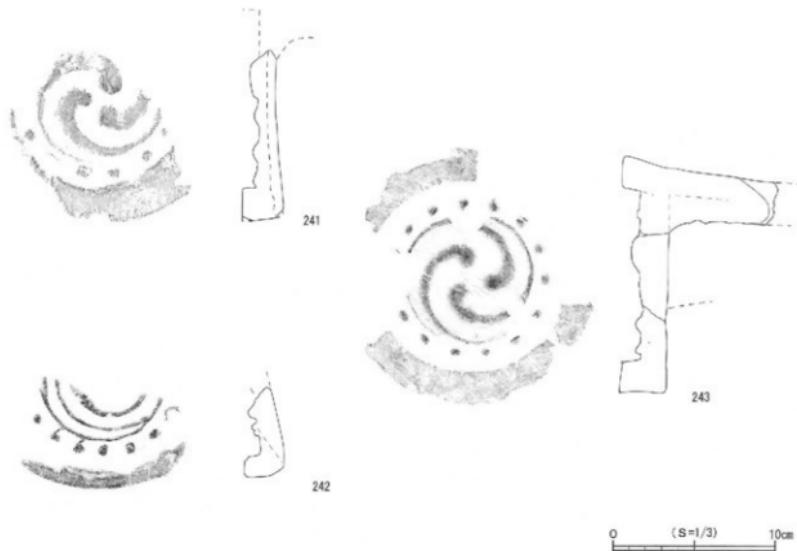
(c) 丸瓦 (第 246 ~ 255 図)

確認できた破片は全て玉縁を備える有段のものである。細部の形態や法量には差が認められるが、製作技法はおおむね共通したものである。焼成は堅緻である。焼成によるものであるが、器表と断面の色調差が小さいものが多い。

胸部凸面は繩叩き後に縱方向のナデを全面に施す。部分的にナデのあたりが弱い箇所に繩叩き痕跡が残るものも認められる。凸面側の面取りは、玉縁端に施す。

凹面には、糸切（コピキ A）、布目、吊り紐の順に製作痕跡が認められる。吊り紐は外締じによるもので、2~3 回大きく垂らす。山の部分でループするもの（法隆寺吊り紐分類 C 型）、結び目をつくるもの（法隆寺吊り紐分類 D 型）の 2 種が認められる（佐川 1989）。

吊り紐痕跡を切って、部分的に内タタキを施した痕跡が認められる（第 251 図 250、第 252 図 251・252）。興福寺、法隆寺などの奈良の寺

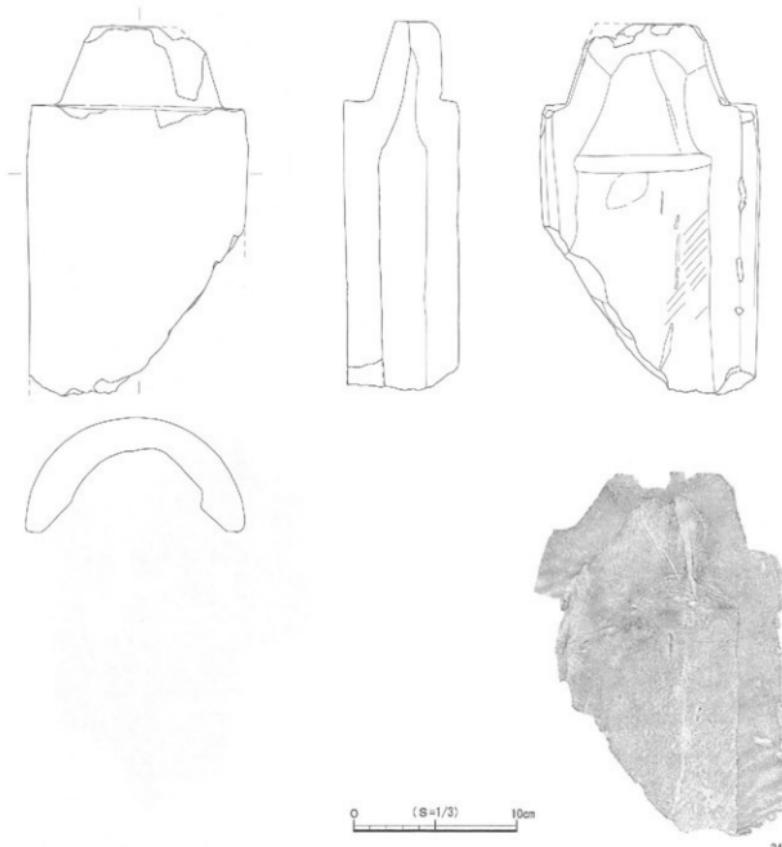


第 245 図 1997 - 2 次 井戸出土軒丸瓦

院で15世紀頃から認められる技法である（佐川1989）。近世以後の全面を叩く技法と区別し、「初期内叩き」とも呼ばれる。丸瓦製作の過程で、歪みが生じたものを凹型台において補正する際の痕跡とされる。16世紀中頃から畿内各地で認められるようになり、安土城などの織豊城郭の瓦にも取り入れられることが指摘され、その動向から法隆寺の瓦制作に携わった橋氏との関連も指摘され

る（武内2001）。交野市域においては、15世紀頃までの瓦には認められない技法である（交野市文化財事業団2012）。16世紀以後の岩倉開元寺跡の瓦などで認められるようになるものである。内叩きが確認できた破片は全て図示した。丸瓦の出土量に占める割合は4%ほどである。

脇部側縁端部の調整の仕方は大きく2種類存在する。1つは脇部側縁凹面の面取り幅が狭く、側



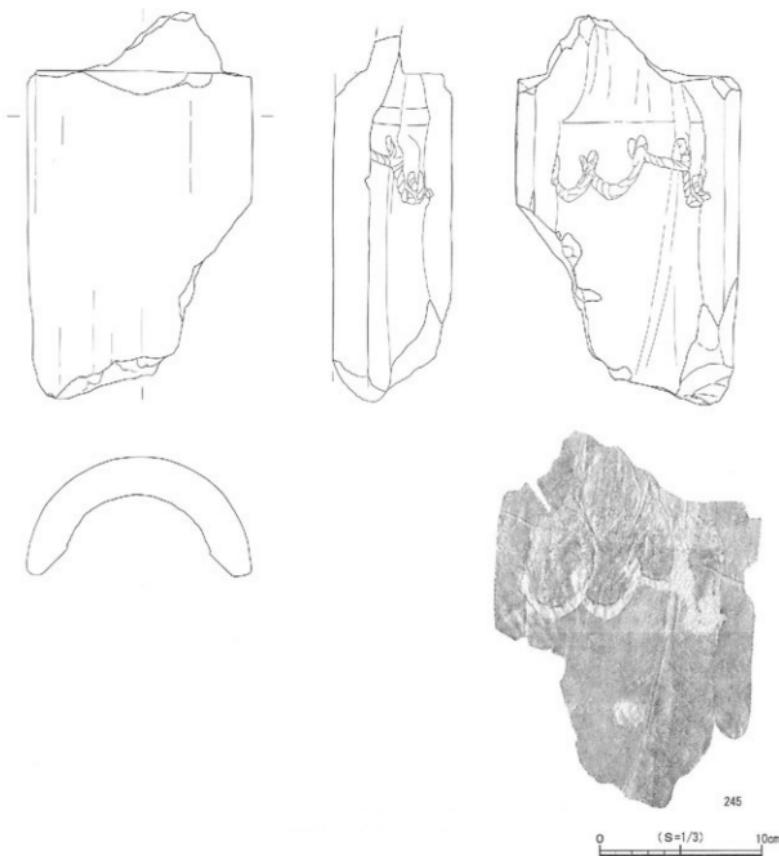
第246図 1997-2次 井戸出土丸瓦1

縁端部がにぶく仕上げられるものが244・245などである。もう1つは面取り幅が広く側縁端部を鋭く仕上げるもので248・250などである。この端部調整の差は本郭出土丸瓦などにも認められるが、両者で法量や他の調整技法に明瞭な差は現状で確認できておらず、細部の調整技法の差と考えられる。玉縁部凹面の調整は、側縁凹面に面取り

を行い、これが胴部まで及ぶ。

玉縁部凹面に粘土を貼り付け、引っ掛け部を形成したもの(247)もわずかに認められる。

破片資料が多く、全長が判明するものは確認できなかった。胴部幅がわかるものについては、14.0 cm前後のもの(245・248・249)と、13.0 cm前後のもの(244)が認められる。ただし、法



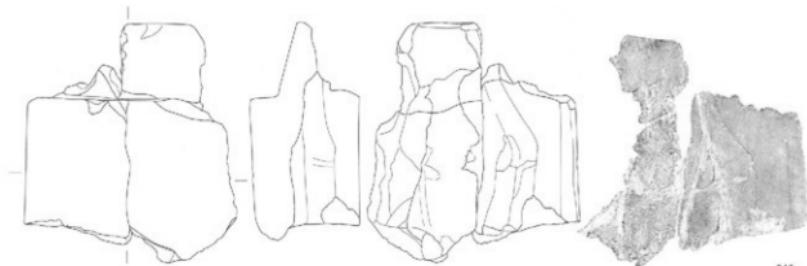
第247図 1997-2次 井戸出土丸瓦2

量差以外に明瞭な差異は認められず、調整・製作技法によって製作されたものとみられる。

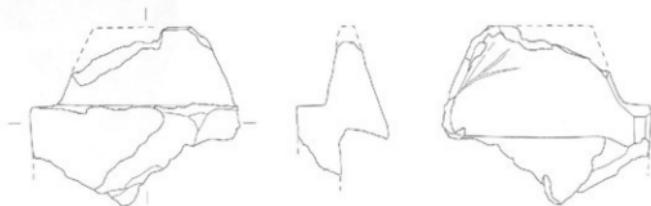
なお、ここでは図化し得なかつたが、胴部に釘孔をもつ小片も存在する。釘孔の形態は四角形である。円形のものは認められなかつた。

以上の丸瓦の特徴からは、その年代はおおむね16世紀頃のものと推定される。製作技法につい

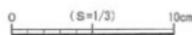
ては、凹面にいわゆる「初期内叩き」を行う丸瓦の存在が注目される。この技法が奈良以外に広がる年代を16世紀中頃以後とする研究成果を参考にすると、丸瓦の一部についてはより限定した年代を考えられる可能性もある。他の軒丸瓦や、軒平瓦と同時期に製作・使用されたものと認められる。



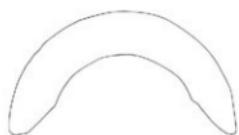
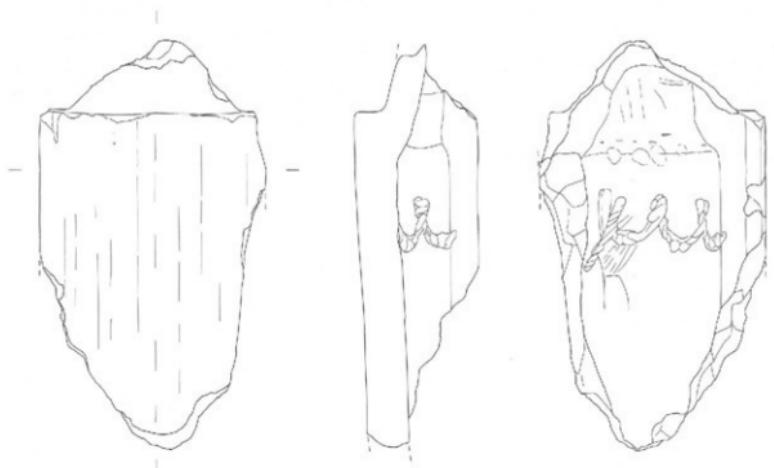
246



247



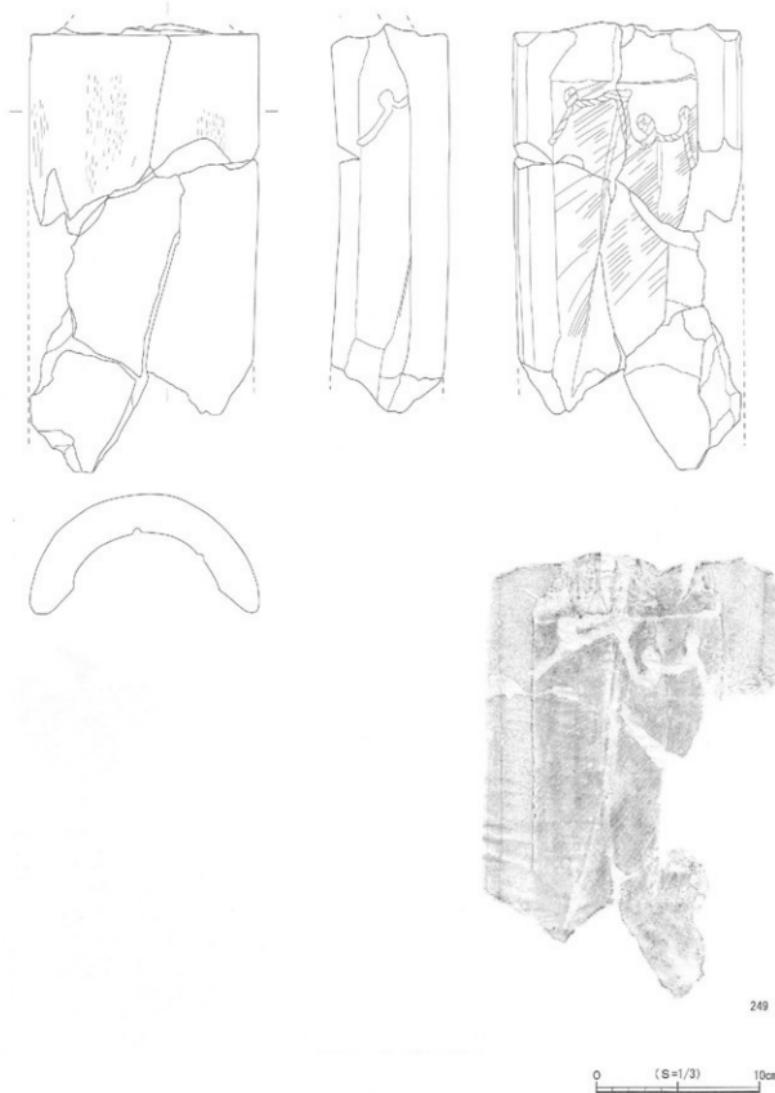
第248図 1997-2次 井戸出土丸瓦 3



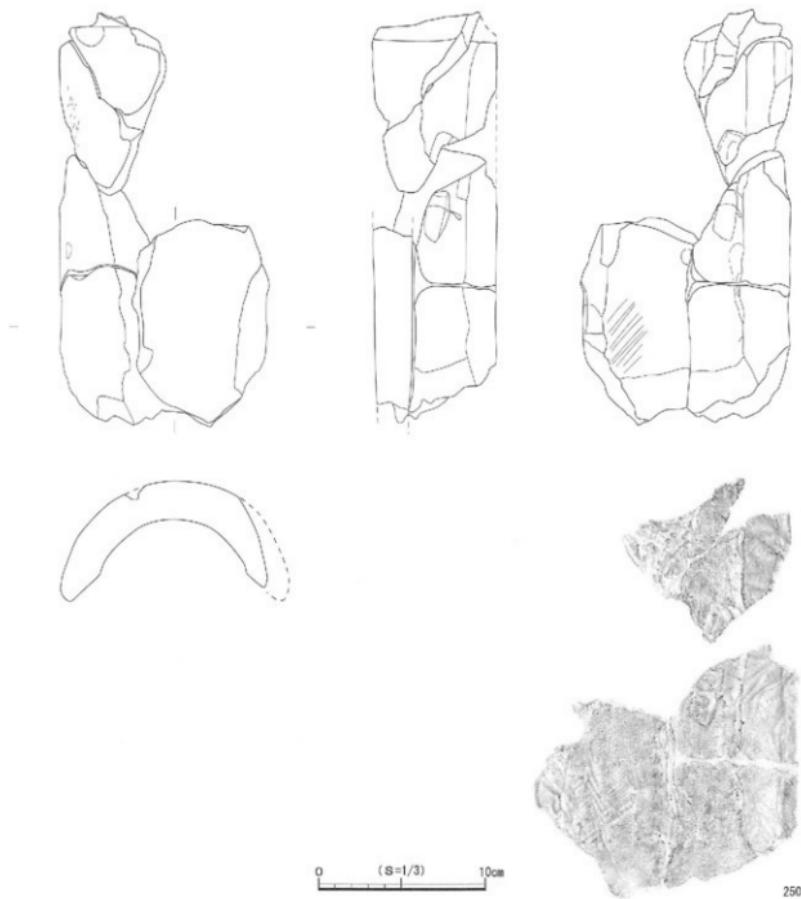
248

0 (S=1/3) 10cm

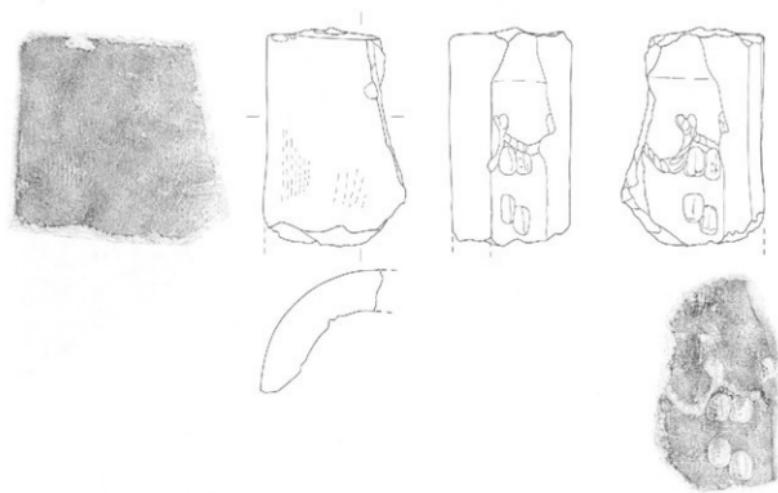
第249図 1997-2次 井戸出土丸瓦4



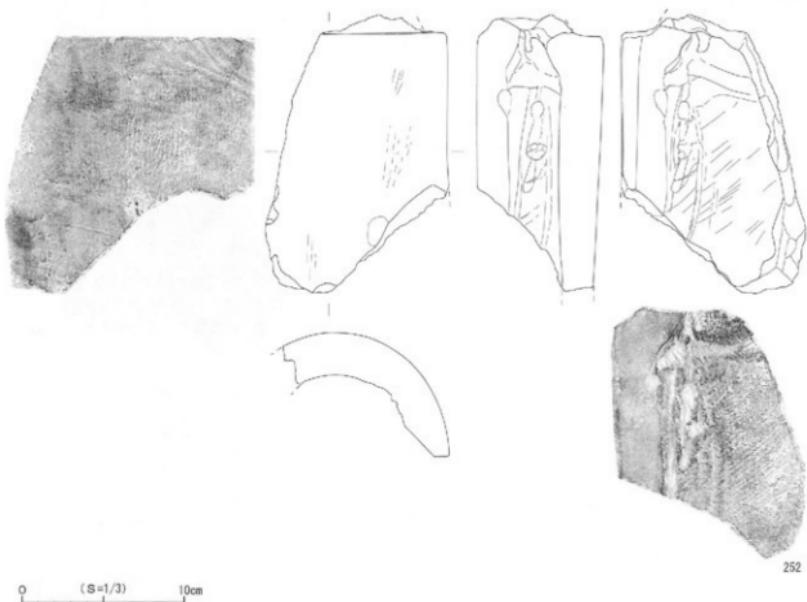
第250図 1997-2次 井戸出土丸瓦5



第251図 1997-2次 井戸出土丸瓦6

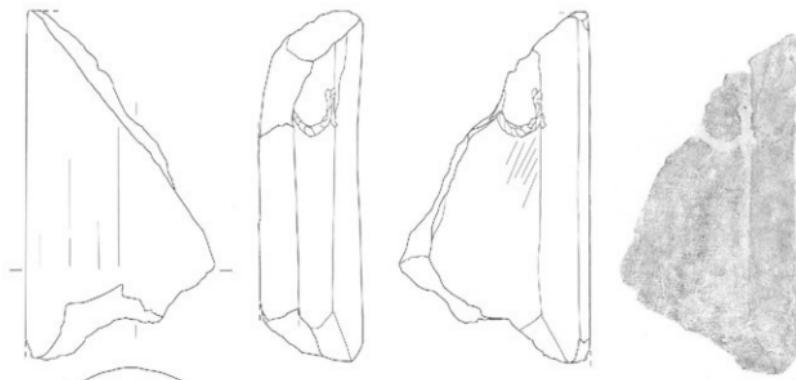


251

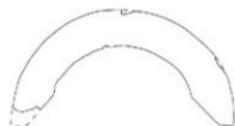
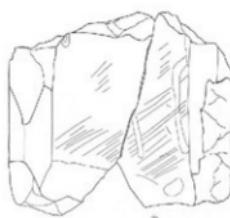
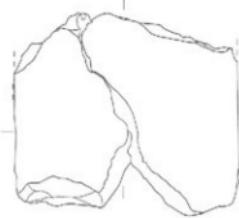


252

第252図 1997-2次 井戸出土丸瓦7



253



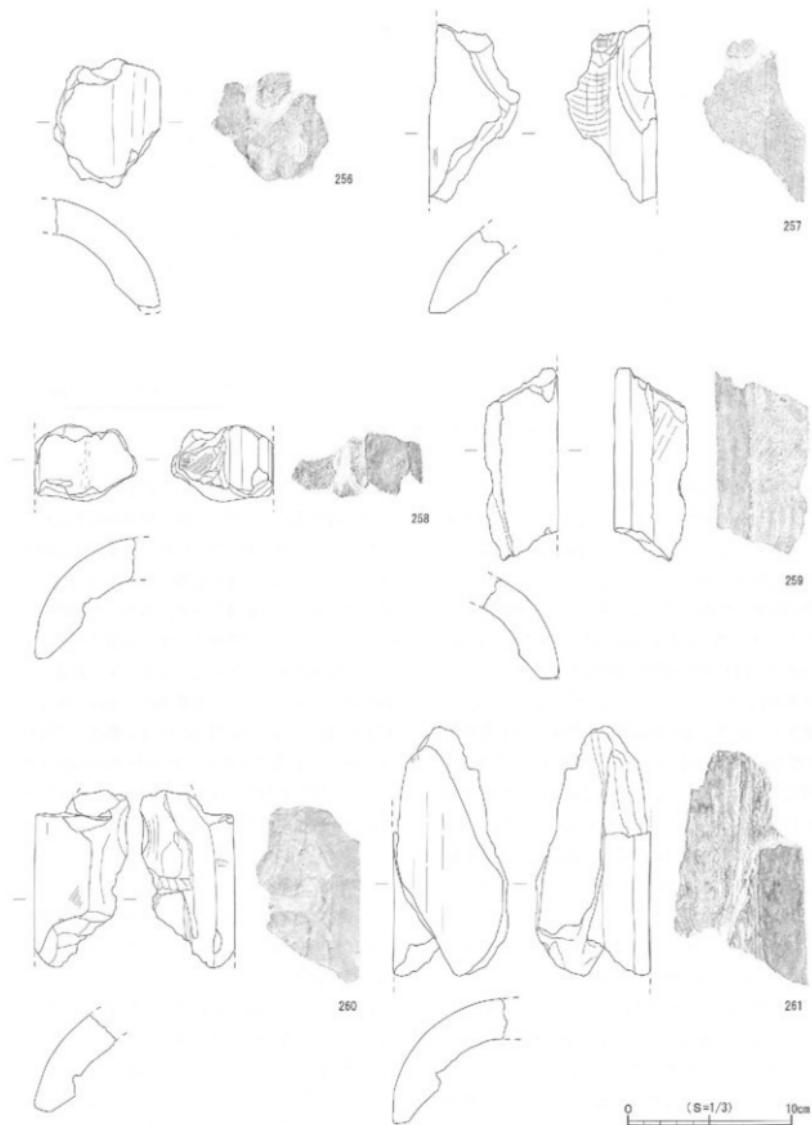
254



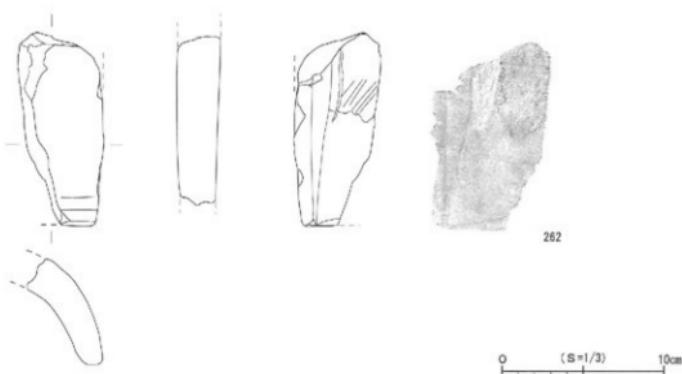
255



第253図 1997-2次 井戸出土丸瓦8



第254図 1997-2次 井戸出土丸瓦 9



第255図 1997-2次 井戸出土丸瓦 10

(d) 平瓦 (第256~259図)

法量や細部調整にわずかな差はあるが、製作技法は共通するものである。凸面側は縦方向または斜め方向を主体としたナデを行う。ナデ調整後に荒い砂粒が付着している。凹型台からの離脱をしやすくするためのいわゆる離れ砂と考えられる。凸面側に離れ砂付着後の調整は行われない。凸面両側縁は面取りしておらず、264のようにバリを残すものが多く認められる。凹型台に平瓦を置いて製作・調整作業を行った際の痕跡と考えられる。類似する痕跡として、267に認められる凸面側縁から幅1.5cm前後で平瓦側縁に沿って、板状工具を押圧したような痕跡が認められる。凸面広端縁には268などのように、板状工具による斜め方向の擦痕が認められるものがある。

凹面は丁寧に縦方向・横方向のナデで調整される。さらに凹面側縁端部は面取りを行い、バリなどの痕跡は認められなくなっている。凹面狭端の面取り幅は、最大で1.6~1.8cm前後である。

凹面と凸面の調整技法の差から、瓦の仕上げ調整の最終段階で凹型台で作業していたものと推測できる。

なお、両面の調整が十分に及ばない箇所には糸

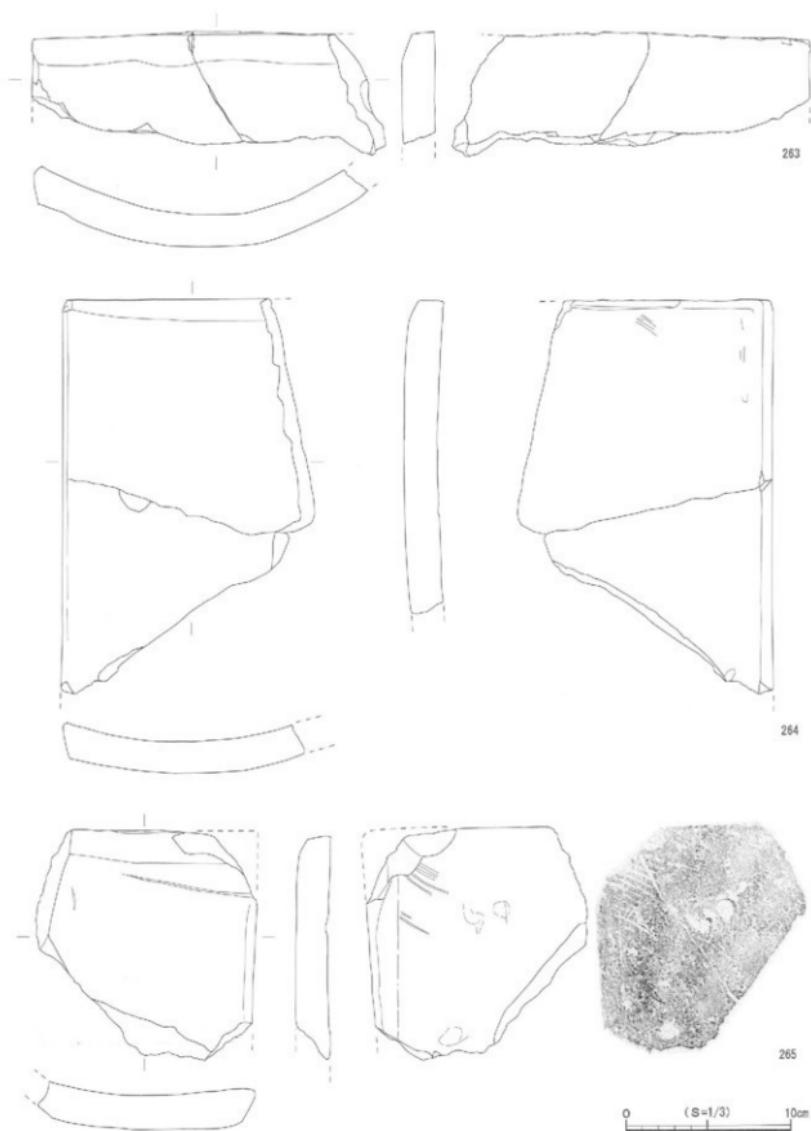
切り痕跡（コビキA）が認められる。

全て破片資料であり、全長・幅が判明するものはなかった。その中で263はある程度幅が良好に残るもので、22~23cm前後に推定復元できる。厚さは2.0~2.7cmほどの幅がある。本郭周辺の出土瓦に比べるとやや厚めの傾向が強い。

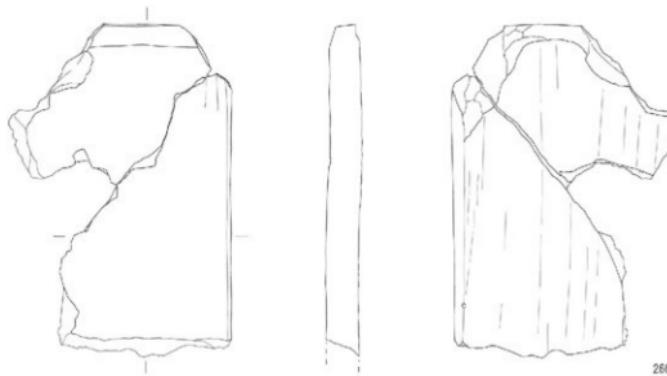
私部城本郭上面で出土した中世平瓦と共に製作技法である。こうした特徴は、交野市域では15世紀末から16世紀初頭の新宮山遺跡の平瓦などに認められることから、16世紀頃のものとみられる。同じ井戸で出土した軒平瓦・軒丸瓦などの推定年代とおおむね一致してくるものである。

(e) 谷丸瓦 (第260図)

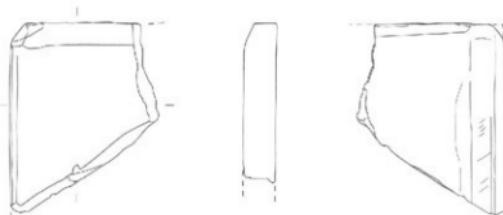
丸瓦を斜めに切り落とした形態の瓦で、屋根の谷間に用いられたものである。274・275がある。出土量は数点であり、いずれも破片である。推定される幅は、14cm前後で丸瓦に類似するものが多い。凸面に縦方向のナデを行う点は丸瓦と共通する。工程の途中までは丸瓦と同様に製作されることがうかがえる。ただし、側縁端面端部は粗いナデにより通常の丸瓦に比べて鈍く仕上げられるなどの差も認められる。



第256図 1997-2次 井戸出土平瓦1



266

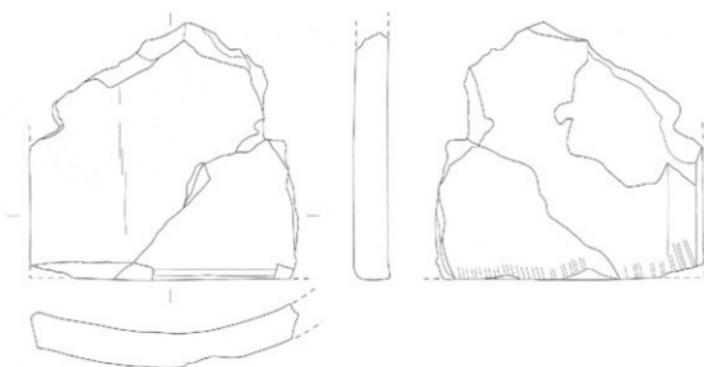


267

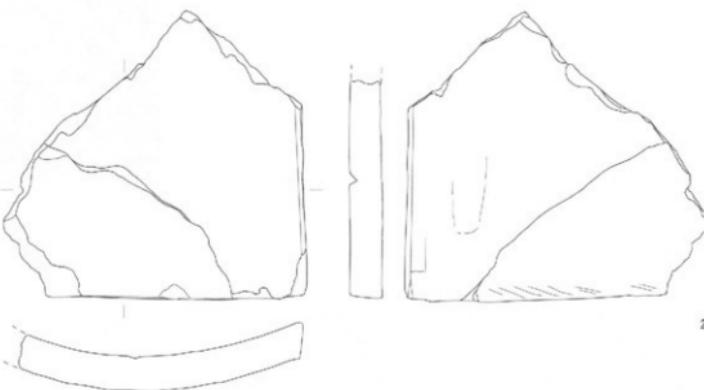


0 (S=1/3) 10cm

第257図 1997-2次 井戸出土平瓦2



268

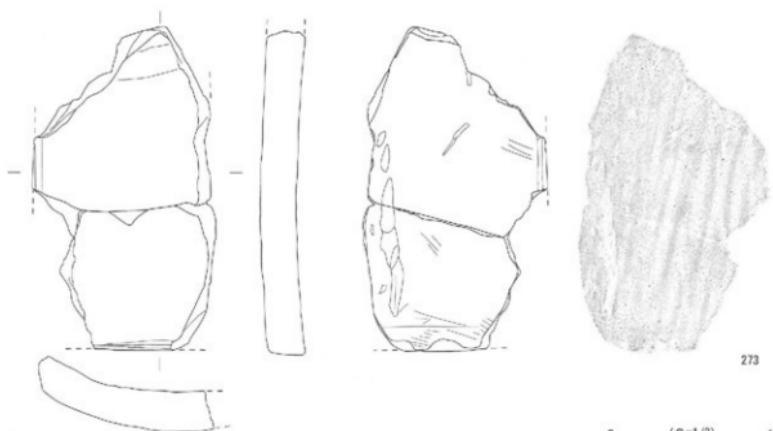
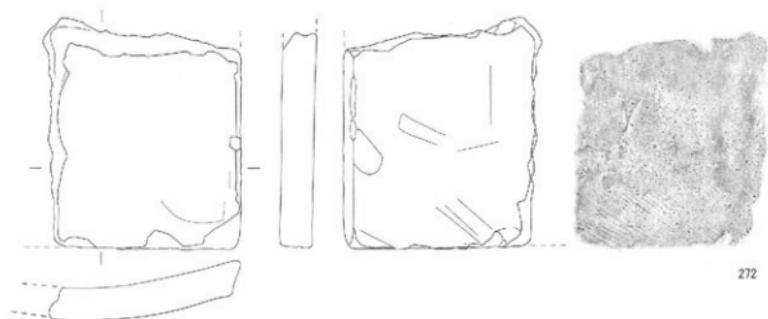
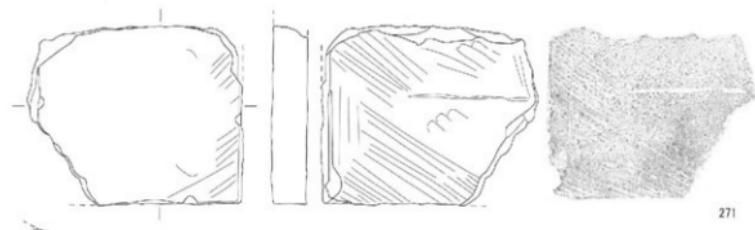


269



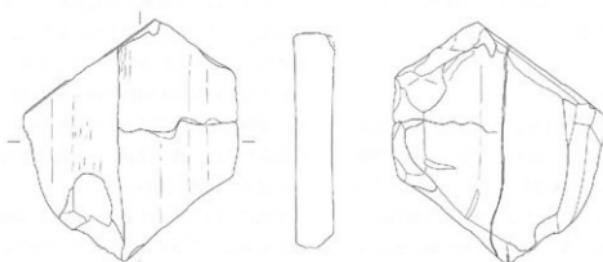
270

第258図 1997-2次 井戸出土平瓦3

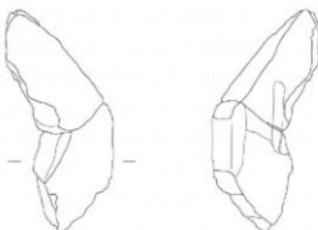


0 (S=1/3) 10cm

第259図 1997-2次 井戸出土平瓦4



274



275



0 (S=1/3) 10cm

第260図 1997-2次 井戸出土谷丸瓦

(f) 鳥衾（第261図）

全て破片資料で全容のわかるものはなかった。276は巴文の瓦当部から胴部の一部を残すものである。軒丸瓦と同窓の瓦当を用いた接合面は確認できない。焼成・胎土も軒丸瓦と類似する。

277～279は鳥衾の丸瓦部の端部である。277・279の胴部側縁端部は丸瓦の端部よりも谷丸瓦のものに類似し、ナデにより丸みを帯びた形状に仕上げられている。278・279は端部調整は丸瓦と類似するものである。

(g) 雁振り瓦（第262図）

雁振り瓦は小片のみ確認された。いずれも凹面側に糸切り痕を残し、凸面側を丁寧にナデで調整する。280・282は側縁端部片である。下方にむけてやや突出させて仕上げる。281は広端部から側縁部の一部を残す破片である。凹面側も面取りが施される。

法量については不明な点が多い。厚さについては280は最大厚が3.7cmと共に平瓦などに比べて分厚いものである。他の2点については平瓦と類似する厚さである。

(h) 鬼瓦（第263図）

283は破損した状態で検出されており、1個体分に接合された。鬼面の頸部付近の破損が大きい。また、母屋の左下半から、鬼瓦を屋根に固定するための取手部も損なわれている。小林章男氏の研究にもとづき記述する（小林1991）。

輪郭は継長の形状である。下辺に丸瓦の曲線の繰り込みが中央部と右端部の2箇所に確認できる。破損している左端部にも繰り込みがあったと考えられる。

連珠溝上辺の止め方は、測辺に沿った曲線で、中央よりに延びないものである。小林の分類3に相当する。連珠溝下辺の止め方は側縁にそって直線でおさめるものである。連珠の頭は連珠溝の中におさまる高さのものである。

母屋の裏面は、端部に緩やかな三角形状の側張りが貼り付けられ、全面に縦方向の粗いナデを行う。小林氏の側張分類の中では、張側こしらえに相当するが、断面形状に半縫取こしらえの様相も残すものである。

鬼面の頭側からみると、下辺11.4cm、高さ6.9cmの半裁した筒状の中空が確認できる。これは、母屋にのせた合子に粘土を置いて鬼面を形成後、合子を抜き取った痕跡とみられる。小林分類では径が太く、テーパーが多いものにあたり、室町時代初め頃から使用される製作技法とされる。

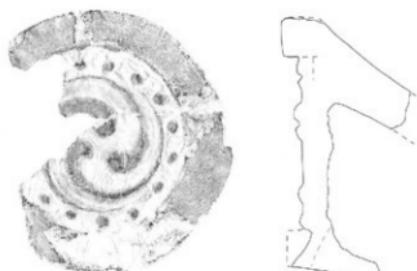
胎土は他の瓦類と同様に纏を多く含むものである。交野周辺の所産である可能性が高い。良好に焼成されるが、燃しあは弱い。色調は青灰色で、断面・表面に色調の差が少ない。

年代についてはこれまでの概要では室町時代後期のものとして紹介してきたが、次のように捉えられる。

まず、緩やかな三角形状の側張りを貼り付け、全面にナデを行う裏面調整技法は、周辺の遺出土のものに類例が求められる。近隣では津田城遺跡本丸山北東地区出土の宝珠鬼瓦に認められる（牧方市教委の許可を得て実見）。同遺跡の瓦類は、16世紀後半頃のものとされる。その他にも、16世紀後半頃のものと目される有岡城出土宝珠鬼瓦も同様である（伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所1992）。これらは安土桃山時代に多い宝珠飾りの鬼瓦という点では283鬼瓦より新相のものである。ただ、製作技法が類似することから、283の年代が16世紀後半に近い時期のものと考えられる。

また、小林氏の紹介する寺院鬼瓦に類例を求める、縦長で、下辺3か所に繰り込みを備える輪郭の特徴は、兵庫県淡路島五色町の河上神社拝殿の鬼瓦に類似する。河上神社鬼瓦は、鬼瓦および丸瓦の銘文より天文年間（1532～1556）頃の製作と判明するものである。

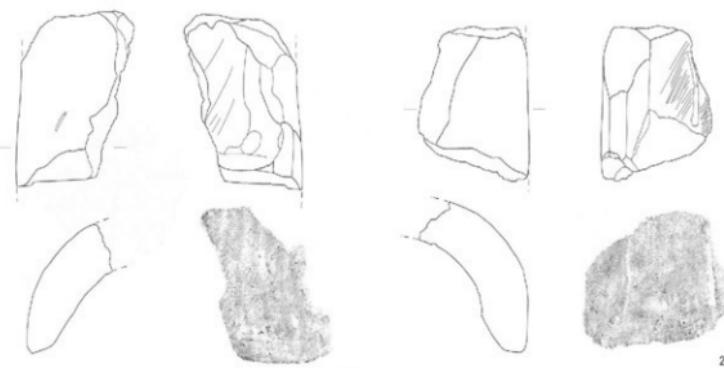
これらの年代の判明する類例をみると、283の



276



277

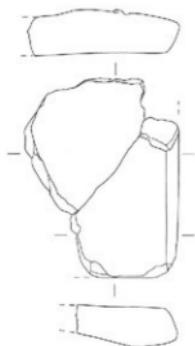
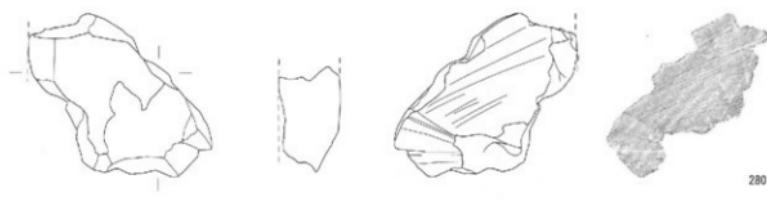


278

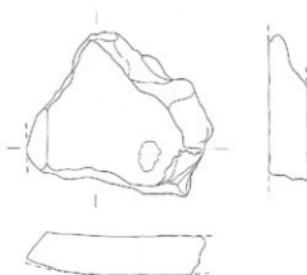
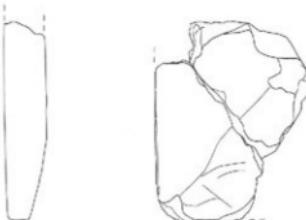
279

0 (S=1/3) 10cm

第261図 1997-2次 井戸出土鳥食



281



282



第262図 1997-2次 井戸出土瓦振瓦



第263図 1997-2次 井戸出土鬼瓦

鬼瓦は16世紀代の所産と認められるとともに、その中でも16世紀中頃に下る可能性の高いものである。

(h) サブトレンチ（周溝）出土遺物（第264図）

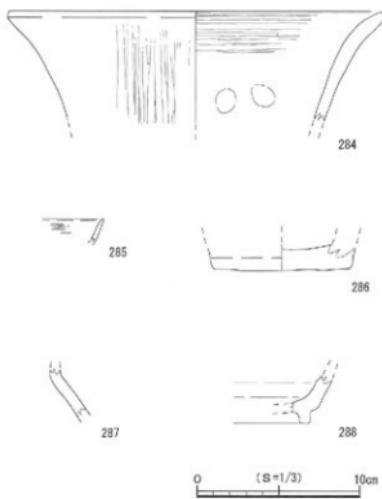
断面観察のための掘り下げ時に出土した遺物であり、井戸の掘り込まれた盛土中に含まれていた土器である。

284は口縁が外反する瓦質深鉢である。外面に縱方向のミガキ調整を行う。内面も口縁部に横方向のミガキを丁寧に施す。15世紀中頃のものとされる（佐藤1996）。

285は瓦器挽口縁部片である。楠葉型で中世前半のものとみられるが詳細な年代は不明である。

286は瓦質土器の底部片である。

286・287は素焼きの土器片で、弥生土器とみられる。



第264図 1997-2次 サブトレンチ出土遺物

288は須恵器の端部片で高杯の脚端部の可能性が考えられる。

こうした遺物のうち、最新相の遺物は15世紀中頃の瓦質土器284であり、出郭（現・光通寺）の盛土はこれ以降の段階に行われたことを示す。

(5) 小結

まず同調査では、出郭と目される光通寺の境内が、15世紀中頃以後に盛土によって形成されたものであることが確認された。私部城の機能段階において、現況の郭状の地形が存在したとわかる。この地形の形成が私部城築城時によるものか、それ以前の光通寺に伴うものかは、他の調査地点の成果もふまえて位置づけたい。

また、限定的な調査区であったが、盛土上の井戸より多量の瓦を検出した。同瓦群の年代は、おおむね16世紀代におさまるものであるが、軒平瓦などに私部城本郭土坑出土のものよりやや古い様相も認められた。新しい年代のものでも、16世紀中頃のものとみられる。

同地点出土の瓦は、従来、光通寺が室町時代にも同地点に存在したことによるものとされてきた。ただし、瓦の年代は私部城本郭出土のものに比べると古相ながら、16世紀代におさまる。うち一部は16世紀の中でも中頃に下る可能性のあるものであった。城が機能した時代に近い年代のものである。また、これらの瓦が廃棄された井戸は、近世の光通寺境内の整地上面のものであった。加えて、同構造で仏器等の寺院関連遺物が出土していないことから、寺院の片付けに伴う廃棄ではなかったものと考えられる。

これらの点をふまえると本調査出土の多量の瓦が、周辺に光通寺等の寺院が存在したことを示すものである可能性は高い。さらに、光通寺または私部集落内の他寺院で利用されていた瓦群が、私部城の南東隅を守る郭上で転用されたものと推定される。他の調査区の成果もふまえて評価したい。

第2項 1999-2次調査

(1) 地点と調査に至る経過

出郭と目される光通寺の北西の平坦面に位置する。縄張り研究において、二郭南から東へ伸びる本丸池の堀と、三・四郭間から南へと屈曲して伸びる堀が同地付近で合流するとみられてきた。

地籍図によれば光通寺などの寺院を含む辻の北西端に位置し、字城との境付近にあたる。



第265図 1999-2次 調査地点位置図

個人住宅建設に伴い実施した確認調査である。

その成果の一部は、平成11年度概要の一覧表中に記載したが（交野市教委2000）、断面や遺物等の図面が未掲載であるため、改めて報告する。

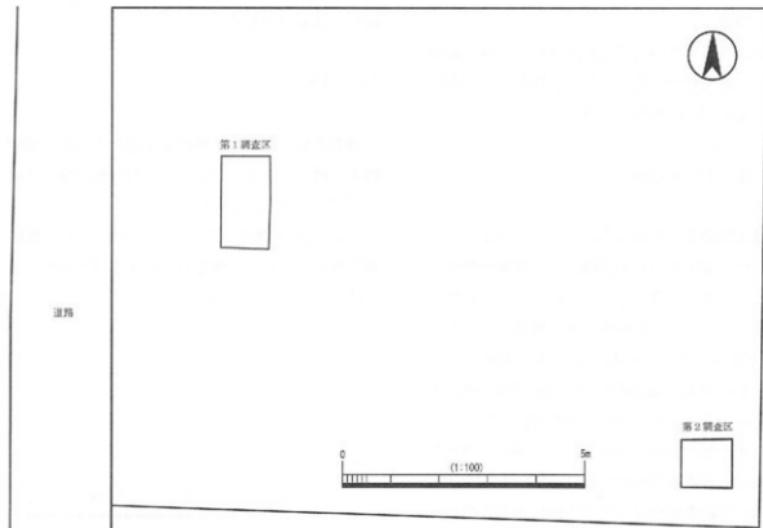
調査地北西部に南北2.0m、東西1.0mの第1調査区を、南東部に1.0m四方の第2調査区を設定した。

(2) 層序 (第267図)

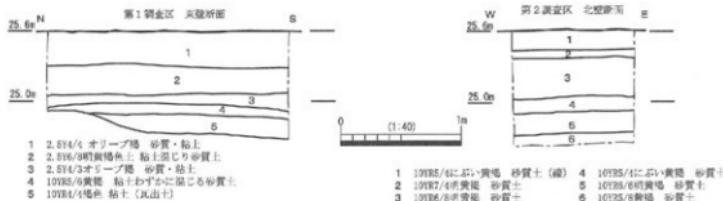
両調査区で下層の堆積状況は異なる。北西部の第1調査区では下層まで遺物などを含む粘土混じりの層が堆積するのに対して、南東部の第2調査区では表土下で地盤層が検出される。

(a) 近世～現代耕作土

第1調査区1層、第2調査区1・2層にあたり、砂質土・粘土の入り混じる層である。近世瓦が含まれ近世から現代までの堆積とみられる。



第266図 1999-2次 調査区平面図



第267図 1999-2次 調査区断面図

(b) 中世の遺構埋土

調査地北西の第1調査区でのみ検出されている。地盤層由来のものとみられる黄褐色土と、旧地表土層などに由来するとみられる褐色系のシルト・粘土が交互に堆積する。層相は、2013・6次第1調査区等で確認された堀埋土に類似する。本調査第1調査区ではT.P. 24.7mまで確認されており、より下層まで深く堆積している可能性が高い。第3層以下で、中世瓦片などの遺物も出土し、近世に下る堆積ではないと考えられる。

(c) 地盤層

第2調査区第3層以下で検出されている。黄褐色から明黄褐色の砂質土である。残存する上面の標高はT.P. 25.4m前後である。

(3) 遺構と出土遺物

堀埋土の確認 第1調査区内ではT.P. 24.7m付近まで中世遺物を含む粘土混じりの砂層が堆積しており、地盤層が確認されていない。周辺地形との対比から、ここに規模の大きい遺構が存在することが判明する。この地点より南で実施された2013・8次調査で地盤層を切り込んだ掘が確認された。南北方向の堀の東側上端を検出したものである。その検出標高や層相から、本調査区の埋土は、2013・8次調査検出の堀に連続するものと判断でき、両調査区付近に南北方向に大きくのびる堀が存在したことがわかる。

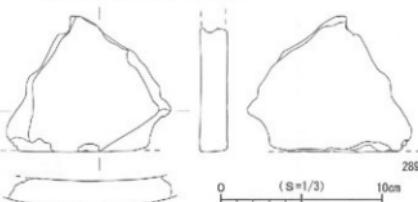
地籍図等では同地点付近に水田が認められる。堀跡が埋没したことにより、水田として利用しやすい地形が形成されたとみられる。

堀埋土の出土遺物 第1調査区の第5層では平瓦片が出土した(第268図)。四面のみを丁寧にナデ調整する製作技法は本郭周辺出土例と類似し中世のものとみられる。この他に土師器片などが出土している。出土遺物は近世に下る堆積層ではないことを示すものの、年代の詳細を決定するものではない。しかしながら、推定される遺構の方向軸や規模から私部城に伴う堀の痕跡とみるのが現状では妥当である。

(4) 小結

調査結果、調査地西端の第1調査区では、地盤層まで達することはなかった。私部城に伴う埋没した堀の存在を示すものである。

また、第2調査区では、旧耕作土下層で地盤層を検出しており、他地点の郭や郭間の通路として機能したものとみられる。



第268図 1999-2次 調査区出土遺物

第3項 2008 - 1次調査

(1) 地点と調査に至る経過

現在の光通寺境内の南端に位置する。建物を建築するのに先立ち、確認調査を実施した。調査地南側に、南北1.8m、東西1.5mの調査区を設定し、工事による予定掘削深度である現地表下0.4mまで全面を掘り下げた。この面までで頗るな遺構・遺物は確認されなかったものの、確認のためサブトレーナーを設定し掘り下げを行った。

(2) 層序（第270図）

現地表面は北側がやや高く、南に向かって下がる。現代整地上である第1層下面でもこの傾斜は認められる。同層下面に属する遺構が第2層上面（第2遺構面）で検出されたものである。

第2層は盛土であり、第3層上面（第3遺構面）の遺構を埋没させ整地したものと評価できる。同層中に遺物細片が混じる。近世段階のものとみられる。

第3層は砂礫層で盛土である。第4層は砂礫混じりの粘質土である。第5層は黒褐色の砂礫混じりの粘質土である。



第269図 2008 - 1次 調査地点位置図

り粘質土である。これらの層は近世石垣の裏込め土の可能性も考えられたが、断面観察からは明瞭な裏込め土とは考えられない。むしろ、近世以後の遺物が混入しないことや、近隣地の1997-2次調査の成果からは第3層以下は中世段階の盛土と考えられる。地盤層は検出されていない。

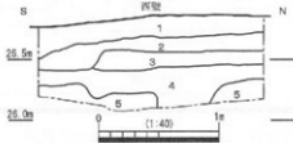
(3) 遺構

第2層上面の第2遺構面検出のピットは、層序からは、近世以後のものとみられる。

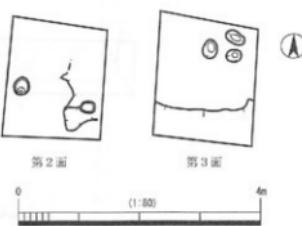
第3層上面の第3遺構面検出の浅いピットおよび溝は中世まで遡る可能性が高い。

(4) 小結

地盤高が現地表下より0.8mは下がり、盛土により現況の地形が形成されたことを確認した。1997-2次調査成果をふまえると、中世段階の盛土痕跡と考えられる。その上面ではピット・溝などの遺構を検出している。



第270図 2008 - 1次 調査区断面図



第271図 2008 - 1次 調査区平面図

第4項 2013 - 8次調査

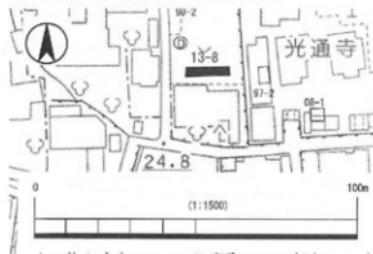
(1) 地点と調査に至る経過

出郭と推定される現・光通寺の西に位置する。同地点は、光通寺に比べて2m前後標高が低く、1980年代ごろまで存在した池から、光通寺の西縁に南北方向の堀が推定された(中井1981ほか)。この堀の位置や年代を明らかにするために、推定される堀を横断するように南北2.2m、東西14.7mの調査区を設定した。

(2) 層序 (第274図)

(a) 現地表土

断面図第1層に対応する。畑等の土壤である。昭和後期以後に形成された層である。



第272図 2013 - 8次 調査地点位置図

(b) 近現代池堆積層

第2～第3層に対応する。現在の耕地化以前に存在した池の埋土で調査区東半で検出された。後述の近世遺構上に堆積し、同層中コンクリートなどの現代遺物も多く含まれていた。層序と遺物から、池の堆積は近世以後現代までと認められる。

地籍図等で近世末頃の同地点の状況をみると、畠として利用されており、池や水田などの記述は認められない。昭和初期の航空写真では池が確認される。下層で近世以前に遡る池や堀跡の堆積は確認できなかった。

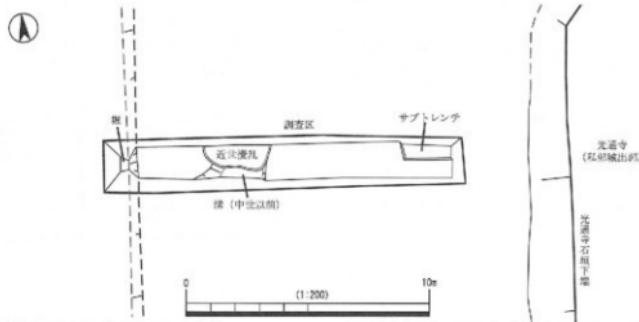
(c) 近世耕作土および擾乱

調査区西端では、旧耕作土とみられる砂混じりのシルト(第5層)およびその埋土(第4層)を検出した。出土遺物から近世までのものとみられる。これに対応するとみられる南北方向にのびる水田が地籍図で認められる。

調査地中央では隅丸方形と推定される擾乱埋土を確認している(第6層)。出土遺物から近世以後のものと考えられる。

(d) 近世整地上

第4～6層に切られるブロック土である(第7～9層)。後述の堀の埋没後に堆積し、周辺地を平坦に整地したものと考えられる。



第273図 2013 - 8次 調査区平面図

(e) 堀埋土

調査区西端で検出された（第10層）。地山由来のブロック土や、旧表土等とみられる褐色ブロック土を多量に含み、人為的に埋没させられたと認められる。埋土は東側で高く、西に向かって低く堆積することから、光通寺側の平坦面上から埋土が供給されたと判断できる。出土遺物から中世の間に埋没したものとみられる。

(f) 中世盛土～中世以前遺構埋土

堀より東側の地盤層上ではブロック土が認められる（第11層）。先述の堀埋土の供給元として、堀の東側に土壌などが存在したと推定される。同層はその基礎部の残存とみられる。近世整地土とした層にも本来は同様の堆積層が含まれるものと推測できる。

また同層下層にはそれ以前の遺構埋土が確認できる（第12層）。

(g) 地盤層

地盤層は調査地西半では、白色礫まじりの黄褐色系のシルト層である。調査地東半では、その下層に緑灰色の堅固なシルト層が堆積する。

(3) 遺構

(a) 出郭西の平坦面と堀

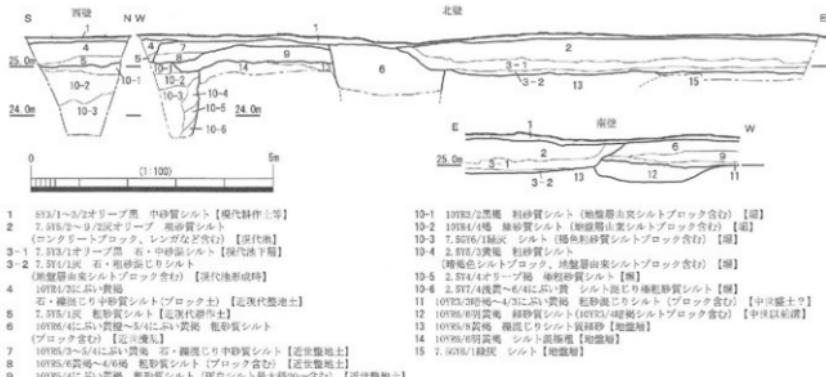
出郭の西で平坦面および堀跡を確認した。

平坦面 調査の結果、調査地東半に推定されてきた堀跡は存在しなかったことが確認された。かわりに、出郭の西側に約13mほどの幅をもつ平坦面が張り付いたことが判明した。帯郭として機能したと考えられる。また、堀の堆積状況からは、堀埋土の供給元となる土壌などの施設が平坦面西縁の堀沿いに存在したと推定できる。

堀 調査区西端で検出した。地盤層を削り急傾斜を形成している。湧水が著しく崩落の恐れがあり、完掘できなかった。堀底面はT.P. 23.5mより深く、比高は1.6m以上である。航空写真や明治初期の地籍図で確認することはできず、近現代以前のものであることは確実である。出土遺物は中世までのもので、層序からも確認できる。平坦面も含めた造成規模や、堀の方向軸からは私部城に伴うものとみるのが妥当である。

(b) 中世以前遺構

調査区中央で検出した。残存部の北端で幅約2m、調査区南端で幅3mと幅が一定しない。埋土



第274図 2013-8次 調査区断面図

の層相から、堀と併存したものではないと考えられる。

(4) 出土遺物（第275図）

表土や擾乱出土の近世遺物以外では地盤層直上および堀埋土で中世遺物がわずかに検出された。

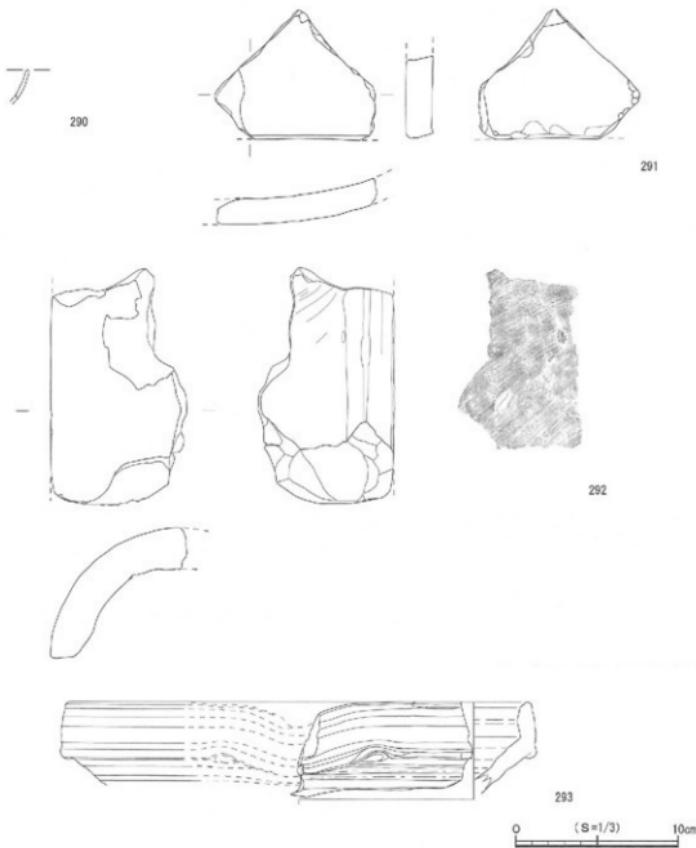
290は土師器碗皿類の口縁部で、調査区東半の地盤層直上で出土した。池の開削に伴い、混入し

たものとみられる。年代の詳細は不明である。

291は堀埋土出土の平瓦広端部片である。

292は堀埋土上部出土の丸瓦片である。製作技
法から中世のものとわかる。

293は第11層より出土した備前陶器掘り鉢の
口縁部片である。年代は16世紀前葉～中頃とみ
られる（乘岡2001）。小片であり、盛土中に混入
したものとみられ、平坦面を整地した年代はこれ
以後と推定できる。



第275図 2013・8次 調査区出土遺物

(5) 小結

現在の光通寺石垣の西に接する位置には堀跡は存在せず、地盤層により構成される平坦面が付属することを確認した。出郭の帶郭として機能したものとみられる。

その平坦面の西で堀跡を検出した。出土遺物から平坦面の整地や堀の掘削年代の詳細を限定することは難しいものの、遺構の方位軸などから推定すると私部城築城に伴うものと考えられる。

成された郭状の平面形態が南北方向を軸とした方形であったことに注目しておきたい。これは、後述の2012-2次調査で検出された中世集落の区画や、近世以後の私部集落に踏襲された西北西から南南東に傾く地割とは異なる。私部集落とともに発展した中世の光通寺としては不自然な形態といえる。むしろ、南北を軸とする点は、私部城中心部の遺構群とおおむね一致するものであることから、現況に近い形に形成されたのは私部城築城と密接に関わるものとみるのが妥当である。

第5項 出郭（現・光通寺）の調査成果

(1) 出郭の形成・形態と年代

盛土による出郭形成 光通寺境内の1997-2次調査、2008-1次調査ではともに現地表土から近世整地上層下で中世段階のものとみられる盛土が深く堆積し、地盤面は確認できなかった。限定的な調査のため、この盛土の範囲がどの程度まで及ぶのかは課題となる。しかしながら、少なくとも1mほどの盛土を隨所に行うことによって、現在の地形が形成されたことが明らかになった。

郭の形態と年代 この盛土は、中世後半の瓦を出土する1997-2次調査検出の井戸により切られていることから近世以後の光通寺建築に伴うものではなく、中世末までに行われた盛土と確認できた。後述の周辺の堀や平坦面とともに、私部城段階に存在したもので、城郭の南東隅を守る郭として機能したものとみてよい。

これが、私部城築城と同時に築造されたのか、それ以前の中世私部の光通寺などの寺院建築に伴うものであったのかは問題となる。盛土を行い形

(2) 出郭西の平坦面と堀の形状

現在の光通寺石垣の西側には、地盤層からなる平坦面が伴うことを確認した。そして、その西の位置、現在の南北の道路が通る付近に、堀が存在することを確認した。この堀の検出範囲は限定されたものであるが、北側の1997-2次第1調査区で掘りとみられる堆積層が確認された箇所へ連続し、おおむね南北方向に延びるものと推定できる。さらに、2013-8次調査地点南の民家において、井戸掘削時に中世の石造物が出土したと記録されることから（中井1982）、この堀が南へも伸び、出郭の西縁に沿うものとわかる。同時に私部城中心部の方位軸にのっとったものであることから、出郭と同様に私部城と密接に関連した遺構と考えられる。

(3) 出土遺物

1997-2次調査井戸から多量の瓦を出土した。室町時代後期頃のものを中心とし、私部城本郭出土のものに比べるとやや古相のものである。その



第276図 出郭 東西断面合成図

年代から、光通寺などの他の寺域に伴っていた可能性の高いものである。ただし、その出土状況は、近世における整地層の直下の井戸より検出され、中世末期に位置付けられるものであった。この出土状況に加えてほかに寺院関連遺物を伴うものではなかった。また、郭形成に利用された盛土中に瓦が含まれないことも注目される。出土状況から、瓦群が郭上で転用され、廃城段階まで利用され他の地に廃棄されたものとみられる。

(4) 室町殿日記の記述

以上のように、発掘調査の結果確認された遺構・遺物は私部城に関連する可能性が高い。江戸時代前期頃の私部城跡の認識をし手がかりとなる『室町殿日記』には、私部城の南側に大手口があり、そこに矢倉が存在したと記されている。

私部城域から南側へ伸びる古道のうち、主要なものは、光通寺の南側付近で屈折し南へのびる山根街道であり、『室町殿日記』に記される大手が現在の光通寺ほかの寺院が集中する地点を指すものとみるのが妥当であろう。



第277図 出郭 平面合成図

『室町殿日記』の推定成立年代には既に私部城に伴う施設は破却され、郭の高台の地形のみが残存していたとみられる。この出郭の地形から、大手に矢倉が存在したとの記述がなされたものとみられる。現在の光通寺付近を出郭として私部城の防衛における重要地点とみられてきたが、近世初頭における『室町殿日記』にみられる記載の中でも同様の認識がなされていたといえる。ただ、矢倉の存在についてはこれまでの発掘調査により追認されておらず、郭上面の調査を必要とする。

(5) まとめ

以上のように、現在の光通寺境内付近に認められる地形は、網張り研究から城跡の南東隅を防衛する出郭と評価されてきた。発掘調査の結果、これが中世段階に盛土されたものと判明した。また、その周辺で帯郭として機能する平坦面や、堀が確認された。これらの遺構から出土した遺物の年代は、本郭周辺の遺構群と同一時期のものと限定しうるものではないが、検出遺構の方位軸などからは、私部城中心域の遺構と密接に関連するものであると考えられる。